

林芙美子のパリ・ロンドン「放浪記」と 彼女をめぐる男たち

福永勝也

はじめに

林芙美子は『放浪記』の冒頭(「放浪記以前」)で「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」と書いているが、作家としての彼女の原点が『放浪記』にあり、彼女の人間性がそこに凝縮されていることは論を俟たない。そこには、幼少期に母親に連れられて放浪し、貧苦の辛酸を舐め尽くしたことが赤裸々に描かれており、さらに青春期に於いてもその日の糊口を凌ぐため職を転々とし、それと歩調を合わせるかのように男性遍歴を繰り広げている。まさに生き地獄からの咆哮といった観すらあり、そのような艱難辛苦を乗り越えて芙美子は逞しく生き抜くわけだが、その荒波に揉まれる健気な姿に読者たちは感動し涙したのである。

一方、最後の作品となった『浮雲』は、太平洋戦争後の荒廃の中で理性によって律することが出来ない男女の愛欲を描いたものである。そこには、自身、数知れぬ恋愛を重ねてきたが故の一種の幻滅と虚無が濃厚に漂っているが、それでもその彼方にひと筋の光明を見出したいという希望、さらには人間再生を予感させるとこまでも前向きな芙美子らしい作品と言えるだろう。この作品の発表直後、彼女は急死しているが、密かに忍び寄る「死」を感じ取っていたのかもしれない。

芙美子は性に奔放な母親を持っていたが故に、その生い立ちは謎に包まれたところが多い。『放浪記』の資料だったとされる五冊の記録ノートにしても、それを見た者はいない。実際、彼女の生年月日すら定かでなかつ

たのである。彼女は「一九〇四(明治三七)年生まれ」と自称していたが、役所に保管されていた出生届によると、戸籍上の誕生日は前年、一九〇三(明治三六)年の二月三日になっている。一九五一(昭和二六)年六月に亡くなっているから、享年四十七ということになる。

その一方で、パリ滞在中の恋人、白井晟一^{せいいち}が五月五日に誕生日を祝っていることなどから、誕生日は五月五日と考えられる。となると、彼女の生誕は役所に届け出た年、つまり一九〇三(明治三六)年の五月五日で、彼女の実年齢も一歳繰り上がり、亡くなった時は四十八歳だったことになる。

『放浪記』や『巴里日記』など自伝風の作品が多い美美子だが、それらには様々な脚色や虚構が巧みに擦り込まれている。それ故、本稿の主題である『巴里の美美子』も発表された作品に加えて、夫に宛てた手紙や小遣帳、日記類を時系列に沿って読み解き、それらを照合することによって初めて「真実」が浮き彫りになるのである。

美美子は「帰るべき故里が無い」と嘆いているが、彼女の心の故郷^{ふるさと}というべき存在は、美美子を産み育てた母親の「キク」、その人であった。キクの生き様は、世間体や倫理観といった社会規範を超越して男を渡り歩く自由奔放なもので、実際、それぞれ父親が異なる四人の子を産み落とし、その後は二十歳年下の男と連れ立って流離^{さすらい}の旅を続ける。美美子もそれに同行させられ、その体験によって醸成された放浪と放埒^{ほうらつ}の血を受け継ぐことになる。

その一方で、『放浪記』から受けるイメージとは違って、美美子の幼少期後半は相変わらず貧苦に喘いでいたものの、生活そのものは一般の人々と大差なかった。美美子は尾道市立高等女学校に進学し、そこで文才や画才を開花させるとともに、帆布工場のアルバイトで稼いだ給金でバイオリンを購入し、音楽も存分に楽しんでいる。幼馴染の恋人もいた。同高女を卒業した一九二二(大正一一)年には単身上京して、明治大学商科専門部の学生になっていたその恋人、岡野軍一と同棲する。しかし、そのような幸せな生活も岡野の実家の猛反対によって引き裂かれ、岡野は美美子と結婚

の約束をすることなく故郷の因島に帰ってしまうのである。

家柄を重んじる旧家の厚い壁の前で「芙美子の恋」は敢えなく頓挫してしまうのだが、それを機に彼女は社会的権威に強く反発するようになり、以来、彼女は糸が切れた^{たこ}罫のように男遍歴を始める。二十一歳の時、十四歳年上の新劇俳優、田辺若男と同棲するが、それは三カ月で破綻する。この田辺との同棲期間中、芙美子はダダイズムの思想家、辻潤に「五〇銭くれたら接吻させてあげる」と誘いをかけ、辻はその言葉を実行に移したという逸話すらある。

芙美子はその後、詩人の野村吉哉と婚約する一方、アナーキズムに傾倒していた詩人、岡本潤にも恋心を抱く。ところが、一緒に同人雑誌「二人」を出した友人の友谷静栄がその岡本と恋仲になり、まもなく岡本と別れて、やはりアナーキズム詩人だった小野十三郎と結婚する。その捨てられた岡本が何を思ったのか、東京・神楽坂の芙美子の下宿を訪ね、「これから東京を離れるので接吻してくれ」と身勝手な頼み事をして、彼女の^{からだ}身体を抱き上げた時、運悪く野村が帰って来たため大騒動に発展する。

この時、芙美子は号泣して野村の許しを請い、事は一応収まったが、その直後、二歳年下の文学仲間、平林たい子に「あんな時は泣くに限るわ」としたり顔で語ったというから、まさに熟練の恋愛師というほかない。この平林は十九歳の時、芙美子と出会って一緒にカフェの女給をしたり、一時、同居するなど、作家として名を成すまで共に労苦を共にした心許せる同志でもあった。

この頃の芙美子の異性関係は万事このような調子で、彼女の周りに群がったのはいずれもアナキーな詩人たちだった。そして、「常に恋をしていないと生きている実感がない」と豪語する芙美子は、彼らの間をまるで恋のチェーンスマーカーのように渡り歩く。その姿は、まさに母親の遺伝子のリメイクそのものであった。当時の芙美子について、正津勉は「初恋の人岡野軍一、新劇俳優田辺若男、詩人野村吉哉…。芙美子は性懲りなく、駄目男に惚れこみ、男に尽くし、毎度男に振られた⁽¹⁾」と述べている。

恋多き女である美美子はけっして美人とは言えないものの、人の心の深奥を見抜く鋭い眼差しと、それとは正反対のあどけない笑顔が男心を惹きつける不思議な魅力を持っていた。身長は一四三^{センチ}と小柄だが、その小さな身体からはいつも弾けるような生命力が発散されており、女給としてカフェで働いている時もその潑刺^{はつらつ}とした姿に心魅かれる男客は後を絶たなかった。つまり、男好きの美美子にも、男を虜にするそれ相応の魅力^{とりこ}を兼ね備えていたのである。

いずれにせよ、この頃の美美子の恋愛遍歴は果てしなきアナーキーの状態⁽²⁾で、同時代を一緒に生きた平林は「彼女のまわりには、躰といういかめしい監視もなく、女の能力を寸詰りさせる世間体も、礼儀作法もなく、このお母さんを親にしたために貞操のおしえさえなかつた」と、その自由奔放で無軌道な行動を彼女の母親とその生い立ちに遡及させて考える。しかし、美美子はその荒ぶれた放蕩の血を彼女なりに律することが出来たのも事実で、平林はそれについて「最後まで^{くず}頹れずあれだけ伸び得たのは、彼女の強靱な資質と、その資質を磨いてくれた放浪生活そのもの⁽²⁾」と考察している。

美美子は「人生で三回結婚した」と述べているが、その多くが同棲だったり、口先だけの婚約だったわけで、正式には一九二六(昭和元)年一二月の画家、手塚緑敏との結婚だけである。彼が名実ともに究極の伴侶となるわけだが、それとて彼女は長い間、入籍しておらず、結婚後も数限りなく恋愛(不倫)を重ねている。夫、緑敏はそれを悉く許容、あるいは見て見ぬ振りをして添い遂げるのである。

美美子の出世作となった『放浪記』が一九三〇(昭和五)年七月に出版されると、その波乱に満ちた人生ストーリーが大衆の間で大きな共感呼び、空前絶後のセンセーションを巻き起こす。美美子はその印税^{ふところ}を懐に同年八月から中国各地を旅して回り、帰国後の一月に『続放浪記』を刊行する。それが再びベストセラーとなり、名実ともに彼女は流行作家の仲間入りをするのである。

1. 『放浪記』からの脱却を目指したパリでの「青春彷徨」と恋人

芙美子は「ヘルマン・ヘッセの『青春彷徨』と云うのを讀んだけれど、私がどうしても欧州へ行きたくなったのは、この本のお蔭にも依る⁽³⁾」と述べているが、幼い頃から絵心があり、卓越した画才を持ち合わせていた彼女にとって、パリは長年、夢見ていた憧れの西洋の街でもあった。

そこは暗くて陰惨で苦勞の連続だった彼女の幼少期の世界と対極にある華麗な「花の都」ということもあるが、「いまの日本の文化は全く惨酷なほど何かあわたたしい感じである。小さくて多彩で、濁っていて…。そのくせ、何も彼もが疲れて老耄^{おいぼ}れていて、何にだって熱情こめて膨れあがる⁽⁴⁾ことが出来ない」と述べているように、芙美子にとって日本社会の閉塞感に対する苛立ちや嫌悪感も洋行の動機としてあった。つまり、伝統や権威主義が罷り通る日本を離れ、生い立ちとは無縁の自分を素のまま受け入れてくれる新天地への憧れがあったわけで、そのためには「何処^{どこ}に行っても悔いは無い」という覚悟すら抱いていた。

その理想郷^{ユートピア}がパリだったわけで、手元にはその軍資金として『続放浪記』の印税があった。幼い頃、貧苦によって機会を逸したという悔いがあったのか、人一倍上昇志向の強い芙美子は自身を磨き上げるためには稼いだ金を惜しみなく遣うという現実的処世術の持ち主でもあった。彼女の頭の中には、「放浪記の芙美子」から脱却して「^{パリ}巴里の芙美子」という新しい作家イメージの醸成という野望があったのかもしれない。渡航前、彼女は庶民的な下駄とお洒落なパリの mismatch を狙った「下駄で歩いた^{パリ}巴里」という作品企画を考えており、実際、それは同じタイトルのエッセイとして発表されることになる。このように、彼女はどのような作品が読者の好奇心^{くすく}を擽るかを常に考え続けた名プロデューサーでもあった。

渡航前、芙美子がシベリア鉄道を利用した場合のパリまでの旅費と滞在費を概算したところ、交通費と諸雑費が約四〇〇円、当地における宿泊費や食費などの生活費が月間約七〇円であることが分かった。それに対して彼女の所持金は約一〇〇〇円で、当初、計画していた一年間の滞在費と帰

国旅費を考えると不足感は否めない。しかも、彼女は日本に残した母親に毎月、生活費を送り続けなければならない。とりあえず、不足分については滞在期間の縮小や、当地でエッセイを書いて原稿料を稼ぐことにして見切り発車することにした。島崎藤村も同様の方法で「パリ通信」を朝日新聞に送り続け、それを糧かてに三年近くパリに滞在しており、それを参考にしたフシもある。

しかし、平林たい子によると、当初の計画はこれとまったく違っていた。芙美子は、画家である夫、手塚緑敏の同行を真剣に考えていたというのである。何といってもパリは「芸術の都」であり、日本人画学生たちにとって其処そこは聖地のような存在である。夫婦でパリに滞在したのは歌人、与謝野寛・晶子の例もあるが、芙美子の脳裏に浮かんだのは詩人、金子光春と妻、森三千代のケースである。十分な資金の無かった二人は、無鉄砲にもアジア各地を放浪しながら小銭を稼ぎ、まるで尺取虫のように少しずつ西進し続け、一年余という気の遠くなるような時間をかけてパリに辿り着いたのである。

これこそ、芙美子の人生を地で行く「放浪記」である。この二人の渡航話に感銘を受けた芙美子は、彼らと同じようにしてパリへの夫婦道中を考えていたのである。実際、平林には「夫と二人の旅費なんて、とても大変でしょう。だからいいことを考えたの。切符の買える所まで行っては、そこでかせぐのよ。まず上海に行って、帯に油絵をかくの。いい考えでしょう。それから、シンガポールでは、歌をうたうかな⁽⁵⁾」「上海あたりの在留日本人会で、手塚が帯の絵などかけば、手塚の旅費位出ると思うのよ⁽⁶⁾」と打ち明けていた。

結局、この夢物語のような冒険を断念して一人で行くことになるのだが、出発に先立って文人仲間たちが開いてくれた壮行会では、芙美子は何故か、終始、浮かぬ顔だった。フランス語を満足に喋ることが出来ない、明らかな滞在費の不足、そしてこれは後に詳述するが、実は主たる動機として恋人を追い掛けてパリに行くというのに、その男が会うのを拒んでいると

いった事情があったのかも知れない。

いずれにせよ、心ここに在らずといった表情の芙美子を目ざとく見つけた文壇の大御所、菊池寛は、心配顔で「何も無理をして行く必要はない、いっそうの事、パリ行きは止めにしたらどうか」と優しく語りかけたという。当時、すでに作家であることよりも、若き作家たちの作品発表の場を提供したり、彼らの生活支援に尽力していた菊池ならではの気配りである。向こう見ずで、思い立ったら何事にも猪突猛進する芙美子の洋行に、菊池は一抹の不安を感じ取っていたのかもしれない。実際、その気遣いは単なる口先だけではなく、彼はパリ到着まもない芙美子の元へ、当時としては高額の三〇〇円を現金書留で送っている。

一九三一(昭和六)年十一月四日、芙美子は東京駅を出発して名古屋と大阪でそれぞれ一泊、さらに門司で二泊した後、九日夜に下関発の関釜連絡船で釜山に渡る。その後、京城、奉天、長春、満州里を経て、二〇日にシベリア鉄道でモスクワに到着している。さらに「退屈極まりない」列車行が続いた後、やっとヨーロッパに入り、ワルシャワ、ベルリン、ケルンを経て十一月二三日午前六時四三分、夢にまで見た「花の都」に到着するのである。

それでは芙美子は何故、駆り立てられるようにパリに旅立ったのか。幼い頃から絵心があってこの街に憧れを抱いていたことは既述の通りだが、本当の理由は愛する男が絵の修行でパリに旅立ったため、その後を遮二無二追ひ掛けたというものだった。

この男は「外山五郎」という画才にも文才にも恵まれた眉目秀麗の主で、その外山について和田芳恵は「外山卯三郎(筆者注：美術評論家)の弟で、五郎と云った画かきが、芙美子の恋人であり、五郎がパリに行った後を追った」、さらに「緑敏(芙美子の夫：筆者注)は、このことを知っていた。五郎は、セロなどをひく、ドンファンで、芙美子は棄てられるに決まっていると思ったから、極力引きとめたが、緑敏の言葉に耳を貸そうともしなかった」(『日本文学アルバム』)と述べている。

また、平林たい子の言を借りると、彼は「青山学院で大岡昇平氏(筆者注：小説家)の二年上の文学青年で、大岡氏にも多大な影響を与えた白皙の秀才⁽⁷⁾」「大変なハンサム青年で、毛並みもよく、教養は大岡氏に影響を与える位⁽⁸⁾」で、文学においてはとりわけチェーホフに造詣が深かったという。さらに「(外山には：筆者挿入)アナーキスチックな傾向があった。それに冷たく、ぶっきら棒で、女を寄せつけないようなところが美美子さんの気に入ったのではないか」と書いているが、まさにそのような激しい性格ゆえに、パリで美美子相手にある“事件”を引き起こしている。そして、平林も和田と同様、「(外山の：筆者挿入)あとを追いかけて、パリでの恋の成就という一縷⁽⁸⁾のはかない望みにひかれて行った」と確信的に述べている。

美美子の男性遍歴を精査すると、彼女自身の薄幸な生い立ちが影響しているのか、外山のような教養人や芸術家、名家の子息に心魅かれる傾向にあり、さらに貴公子然とした美男子、つまりイケメンであることが必須条件だった。それに加えて、年下好みでもあった。実際、外山はハンサムであり、年齢も彼女より四歳年下だった。美美子は外山が描いた絵を所望し、それを部屋に飾ってうっとりとして眺めていたというから、同じ画家である夫、緑敏の心境は一体、如何なるものであったのだろう。その外山が画家を目指してパリに旅立ってしまったため、人妻であるにも拘わらず、美美子はその後を追いつける決心をしたというから、その妻まじいまでの恋情は到底、常人が推し測れるものではない。

2. 『滞歐記』『巴里日記』『小遣ひ帳』『日記』から浮かび上がる真実

本稿では、美美子が発表した『滞欧記』や『巴里日記』といった著作物、種々のエッセイに加えて、遺族が公開したパリ滞在中の小遣ひ帳や私的に綴った日記、さらに夫に宛てた手紙の内容などを比較検証することによって、当地に於ける彼女の日々の生活や行動、出来事、心模様、さらには彼女を取り巻く日本人男性たちとの交流の実態に迫った。

美美子は帰国後の一九三七(昭和一二)年に『滞欧記』を刊行し、それに

続いて一九四一(昭和一六)年に『日記 第一巻』を出版している。この『日記』の中でヨーロッパ滞在中の一二月一六日から五月三十一日までの記述が、一九四七(昭和二二)年に『巴里の日記』と題して刊行される。そして、この『巴里の日記』は一九五二(昭和二七)年刊行の「林芙美子全集第八巻」に『巴里日記』と改題されて収録されている。

このような経緯から、芙美子のパリ紀行はエッセイなどを除けば、『滞歐記』と『巴里日記』に収斂されるといっても過言ではない。とりわけ後者の『巴里日記』は、『日記 第一巻』や『芙美子全集』に収録されていたため、その内容は信憑性が高いと考えられ、多くの芙美子研究家が評伝や伝記に引用している。

その一方で芙美子はパリ滞在中、毎日、金銭出納帳(小遣い帳)にお金のお出し入れを几帳面に記し、その余白にその日に起きた出来事をメモ風に事細かく綴っていた。この金銭出納帳は黒草表紙の手帳で、パリに到着した一九三一年十一月二三日から翌年の一月六日まで約一カ月半にわたって、支出した切符代や駅の赤帽代、食事代、日本に送る手紙の切手代、さらには道端で買ったキャラメル代まで事細かく記しされている。筆舌に尽くし難い苦勞をした芙美子ならではの、生存のための節約を旨とする家計簿である。

表紙の裏には、芙美子の手で「巴里の小遣ひ」と書かれている。これは「小遣こづかひ」の誤記であるが、遺族の了解を得た今川栄子氏が自身の編書『林芙美子 巴里の恋』でこの手帳を「巴里の小遣ひ帳」(一九三一年十一月二三日～一九三二年一月六日)と名づけ、その内容を公表している。その結果、そこに書かれている厳然たる事実と、タイトルに日記の冠をつけた『巴里日記』の記述内容の間に数々の相違や齟齬、矛盾があることが判明する。このような検証作業によって、後者が日記を装った小説、つまり虚構や脚色に彩られた創作的要素の強いことが浮き彫りになったのである。

この「巴里の小遣ひ帳」を引き継いだのが、その一二月二二日の項に登場する「日記 ボンマルセ 3・00(F)」、つまり芙美子が同日、パリの有

名デパート「ボン・マルシェ」において三フランで買い求めた大判の特製日記帳(実際は育児日記帳)である。彼女は翌一九三二年一月一日からその日の出来事や会った人のこと、天候、自身の体調など諸々をその日記帳に綴り始めている。また、パリにおける新しい恋人の誕生や彼に対する熱い想い、度重なる逢瀬、そして愛を確かめる小旅行についても赤裸々に書かれていたと思われるが、肝腎の小旅行の時期を含む四月二五日から帰国直後の六月末までのページは破り取られていた。

今川氏はこの日記を「一九三二年の日記」(一九三二年一月一日～一〇月三十一日、編書解説文では〈原日記〉)と命名しているが、本稿では『巴里日記』と区別するために「ボン・マルシェ日記」と称する。

『巴里日記』によると、美美子がパリの北停車場に到着したのは一九三一(昭和六)年一二月二三日午前六時二〇分となっているが、実際は一カ月前の十一月二三日午前六時四三分である。帰国日時も同様で、『巴里日記』では一九三二年(昭和七)年五月二三日にパリを発ち、同年六月二五日に神戸港着とあるが、実際は五月一二日にパリを出発して、神戸港着は六月一五日だった。

このパリ到着時の様子は、『巴里日記』では「誰も迎えてくれる人もなく、また誰に逢うと云うひともない、そんな旅人の哀しさが、私をとまどいさせている」「有為転変と云っていいのか、私は自らの激情にまかせて迎えたこの怖ろしい運命の旅を、これからどんな風にして突き進んで行っていいのかわからない。呆然とした気持で、私は数個のトランクを、ひとりで汽車より下ろす」とある。

シベリア経由の長い列車の旅を終えてやっとパリの駅舎に降り立った美美子、これから女ひとり、如何にして生きて行けばよいのか、それを教えてくれる知り合いもない——これから遭遇するであろう幾多の苦難を予感させる描写で、そこには不安に彩られた旅愁が色濃く漂っている。読む者の心に、その哀感がまるで映画の一シーンのように染み入る名文である。つまり、読者の頭の中にあるパリの憂愁デジャヴといった既視感を巧みに刺激して、

それを自身の孤独な旅に重ね合わせ、彼らを知らず知らずのうちに「^バリ^リ」に誘^{いざな}って行くのである。

つまり、これから当地において芙美子が紡^{つむ}ぐであろう「^バ里物語」の華麗なる序章だったわけで、これについて今川英子も「霧雨の中の停車場にひとり降り立⁽⁹⁾った孤独な旅人の心細げな様子を印象付けようとするかのような書き振り」と指摘している。つまり、これは「日記」と称しているものの、実は練りに練った「小説」のイントロだったわけで、関川夏央も「粉飾、あるいは体験の物語化は『放浪記』以来しみつ⁽¹⁰⁾いた彼女の癖」だったと分析する。

その『巴里日記』によると、パリ北駅に降り立⁽⁹⁾った芙美子は、自動車（筆者注：タクシーのことか）の運転手が話しかけてきたので、荷物を持ってもらってその車に乗ったとある。ところが、この運転手に友人のいる「ダンフェール・ロシュロー街へ」と告げたにもかかわらず、発音が悪かったのか、車はセーヌ河を渡って十四区に向けてひた走り、結局、エドガル・キネー街というところで停車したため、そこにあった安ホテルに泊ることになったという。

ところが、これは事実とは似ても似つかぬ虚構だった。そのことを証明する根拠は幾つかあるが、まず第一にパリ到着直後、夫、緑敏に出した手紙が挙げられる。そこには「(到着時に：筆者挿入)別府君が迎えに来てくれた」「別府さんここに落ちつき、夕方すぐ二十軒ぐらい離れたホテルに下宿した」と記されており、実際はこの別府氏が出迎えていたことが分かる。彼は芙美子より三歳年上の画家、別府貫一郎のことで、彼が日本を出発する時、彼女は饞別として手作りの下帯一〇本を贈っている。当然、同業である緑敏も彼のことを知っており、その別府が芙美子から連絡を受けて、早朝の駅舎のホームでもう一人の日本人と一緒に彼女の到着を待ち受けていたのである。

そして、芙美子と別府たちはタクシーでモンパルナスに隣接したダゲール街の別府のアパートまで行き、芙美子はそこでしばし長旅の疲れを取っ

た後、彼に手作りのご馳走を振る舞われている。そして、夕方になって、彼が手配していた近くのホテルに移って旅装を解いたというのが真相である。「巴里の小遣ひ帳」の一〇月二三日の項にも「別府さんとこでよばれる」と書かれている。

また、作家でありながら芙美子研究でも知られる平林たい子は、当の別府貴一郎から直接、聴き取り取材をして、「別府氏が電報によって北停車場に迎えに出ていた⁽¹¹⁾」と断定している。それに加えて、到着時の芙美子の服装が「格子縞のきものに黒縹子の襟^{えり}をかけて、断髪に黄楊の櫛をさして⁽¹¹⁾」ことまで突き止めている。

いずれも、別府の証言に基づくものだが、『巴里日記』に於いて別府の出迎えを無かったことにした理由について、平林は「一人旅の孤独を謳う全体の構想のため⁽¹²⁾」と今川と同様の見解を示している。ただ、平林は『巴里日記』の記述内容について比較的寛容で、「一人きりでパリの駅におりたった、という虚構以外は、案外正直に外山を追う自分の心象を見つめて語っている⁽¹²⁾」と評価している。

また、別府の出迎えが書かれなかったもう一つの理由として、彼女はパリ滞在中、芙美子が別府と仲違いし、喧嘩別れしていたことが影響していると考えられる。帰国後、芙美子が『巴里日記』を執筆する際、その別府に出迎えられたと書くことに抵抗感を抱いたのではないかというのである。

いずれにせよ、その別府のお世話になって芙美子はひとまずホテルに落ち着くが、その直後に夫、緑敏に宛てた手紙には浮き浮きとした気持ちが滲み出ている。「私は体が元気でうれしい。風呂へ行つたら湯がまつくろになつた」「うんとかせぐ故、お前さまも心して来年竹中君達と来なさい」「私は、下駄をはいて巴里人を驚かしてゐる。東京にゐた通りの姿です⁽¹³⁾」。また、髪の毛をカットしたらしく、「床屋へ行つたら、私の顔の様子が変つてしまつた。とてもハイカラさんになりました⁽¹⁴⁾」「こんな髪のかたち⁽¹³⁾」と見事なタッチで自分の新しい髪型をスケッチしている。

そこには憧れの「花の都」にやって来たという昂揚感と「パリ何するも

のぞ！」といった意気込み、さらにこの体験を生かして小説家として飛躍する決意のようなものが伝わって来る。また、渡航前に芙美子はパリの街を着物姿で闊歩し、「下駄で歩いた巴里」という紀行文を書きたいと語っていたが、それを早くも実行に移していることが分かる。ちなみに、この題名の紀行文は「婦人サロン」（一九三二年二月号）に掲載されている。

この手紙では、宿泊しているホテルについて「ホテルと云つても落合のそばの下宿屋みたいに安つぽいところ、ごみ〜したところ本郷のやうなところ、たゞしたてものは銀座以上、古風で何としても画かきの来るところです」とある。また、パリジェヌについては「巴里女は、着物が美しいきりで婆さんばかりだ」と辛口の評を下している。その一方で、日々の生活ではパリ名物のクロワッサンとコーヒーの朝食が気に入ったようで、「朝々、近くのキャフェで三日月パンクロバチンの焼きたてに、香ばしいココフィを私は愉たのしみにしていたものである」「巴里的な朝飯は、一番私たちにはいい(16)ような気がする」と書いている。

3. 恋人、外山五郎げきりんの逆鱗ぎんたんに触れ、惨憺たるパリ生活に

一方、芙美子のパリ渡航が恋する外山五郎に会いたい一心からだったとすれば、パリ到着時、そこに外山の姿がなかったことは痛恨の極みだったに違いない。彼女にとって外山がすべてであって、別府がどれほど甲斐甲斐しく世話をしてくれても眼中にはなかった(筆者注：当時、読売新聞の特派員だった松尾邦之助も文化部長、清水弥太郎からの指示で何かと扶美子の世話をしている)。

その外山だが、実は芙美子から「パリに行く」という連絡があった直後、鬱陶しく思ったのか、大慌てでパリ郊外に引越しをして姿を晦くらましている。そして、友人である別府に「芙美子が来ても新住所は絶対に教えないように」と念押しをしていた。このことを知らぬは芙美子ばかりなりである。しかし、芙美子が外山を追い掛けてパリに行ったことは夫の緑敏も承知していたわけで、それを気にしていたのか、芙美子は夫への手紙で「外山君

は田舎に行つてゐられるようで、別府さんの話では来年春頃はかへられるとか、音楽にこつたり少しジレットだど云つてゐた⁽¹⁷⁾と一応、律儀にも報告している。

パリ到着後の美美子は、目当ての恋人の行方が分からないということで落胆していたことは間違いないが、この手紙からも明らかなように^{そとずら}外面は比較的平静を装っていた。しかし、心の中は悲しみと絶望感が渦巻いていたようで、「小遣い帳」には「ベッドにやすんでゐたら涙^{なみだ}が出て仕方がなかつた」「日本へかへりたい⁽¹⁸⁾」と本音が綴られていた。

その傷心を覆い隠しながら、何かと世話をしてくれる別府との交流が始まり、二六日にはサロンに出展された彼の絵を見に行っている。この頃は別府に対して恩義を感じていたと見え、夫への手紙では「今日サロンに出された別府さんの絵をフランスのヒヘウ(批評：筆者注)家が、大変ほめて新聞にかいてみました⁽¹⁹⁾」と褒め称え、さらに「(別府氏は：筆者挿入)一番フランスへ来てゐる日本人でえらいやうに思ひます⁽¹⁹⁾」「別府さんから云へば、フランスへ来てゐる日本人ぐらいつまらなくくだらないものはないからと云つてゐます⁽¹⁹⁾」などと彼に対する心酔が感じ取れる。

かといって、外山への想いが消えるはずもなく、その切々たる想いは毎日のように「小遣い帳」に吐露されている。十一月二七日「朝、床の中で呆んやり眠が覚めたら泣いてゐた。淋しかつたのだらう。朝馬鈴薯とするめをたいてたべる。固くてまづい⁽²⁰⁾」、同二九日「一日中寝る」「何もかけず暗い巴里だ。ひるの三時から、朝の五時頃まで寝る。風がなほらない、頭が重い⁽²¹⁾」、同三〇日「食欲進まず、部屋の暗いのが何より淋しい。暈が恋ひしい炬燵が恋ひしい。あすはもう十二月だ。緑さんや⁽²²⁾」。

その背景にあるのが外山の不存在であることは明白で、これらの独白が美美子の偽らざる心境だった。この間、十一月二八日には約五〇人が参加して日仏文化連絡協会主催の歓迎会がオデオン座前のレストランで開かれているが、彼女の心はそこに在らずだったに違いない。

男女関係の機微について人一倍感受性の強い美美子は、この頃、外山に

嫌われ避けられていることを察知していたことは容易に想像できる。かといって、そのようなことで打ち^{ひし}拉がれ、身を引く彼女ではなく、口封じされていた別府をあの手この手で問い詰め、遂に外山の“隠れ家”を聞き出すのである。そして一二月四日、その別府に案内させてパリ郊外アルジャントゥイユの外山宅を抜き打ち訪問する。ところが不運にも、外山は外出していて留守だったため対面を果たすこと叶わず、当日の『小遣い帳』には「元気を出す事だ」としか書かれていない。外山に会うためにパリにやって来たのに、それが出来ないとすれば気分が滅入るのも当然で、この頃の「小遣い帳」には「仕事を始めるがとてもざつぱくな頭だ、日本へ帰⁽²³⁾へりたい」(一二月一日)、「物静かな夜だ。あゝ早く日本へかへりたい」(同一四日⁽²⁴⁾)という郷愁病に陥ったかのような記述が続く。

そのような迷路に入り込んでしまった芙美子が雑念を振り払って、その苦境から脱出するには本業である作家としての執筆活動に専念するしかない。島崎藤村は姪とのスキャンダルを忘れるためにフランス語の習得に没頭したが、芙美子は職業作家として原稿用紙に向かったわけで、それが功を奏して一二月一八日の朝には五日間かけて書いた初めてのエッセイが完成し、それを日本に郵送している。それが雑誌「婦人サロン」に掲載された「下駄で歩いた巴里」だったわけで、そこには別府の手に成る挿絵が描かれていた。

その「下駄で歩いた巴里」には、パリにおける芙美子の生活ぶりが微に入り細^{うが}を穿って描写されている。それによると、芙美子が寄宿していた安ホテルの部屋には自炊が出来るように「半坪ばかりの台所とガス台」、さらに「ガタガタの^{まる}円テーブルと椅子」が置かれていた。そして「二ツある椅子と来たら背が高く、足がどうしてもぶらんこしてしまいます」「一番私の神経を焦^{いら}らせるものは七面に張ってある壁紙。まるで安宿みたいに紅色の花模様で、何かあわただしくなやましい⁽²⁵⁾」とまるで連れ込み宿のようなけばけばしい室内装飾に憤懣^{ふんまん}やる方ない様子だった。そのホテルには七匹の野良猫と二匹の犬が棲みついており、それがよほど嫌^{いや}だったのか、

「巴里の猫ほど気味の悪いものはありません。糸玉のようにふくれあがっていて、夜ふけて帰って来ますと、暗がりの天井から背中におこちて来ます⁽²⁶⁾」とまるで化け猫でもあるかのように書いている。

それらとは対照的に、パリでの食事については「パンがうまくて安い。こっちは薪^{まき}ざっぽうみたいに長くて、これを嚙^{かじ}りながら歩けます。これは至極楽しい。巴里の街は、物を食べながら歩けるのです⁽²⁷⁾」とご満悦である。そして、パリの街を着物と下駄^{かつぽ}で闊歩するという現地の人々の度肝を抜くような行動についても、「買物に行くのに、塗^{ぬり}下駄^げでポクポク歩きますので、皆もう私を知っています⁽²⁷⁾」と多分、感じたであろう好奇の目を一向に気にしない天真爛漫さを披露している。その一方で、目抜き通りで目にした老女たちの厚化粧^{へきえき}には辟易としたのか、「こっちのお婆さんを一人日本へ連れて行って銀座を歩かせたら、皆おばけだと云って笑うでしょう。頬紅^{ほおべに}が猿のようで、口唇は朱色、眼のぐるりをアイシャードで引いて、何の事はない油絵⁽²⁸⁾の道中」と辛辣極まりない言葉を投げ掛けている。

一二月四日に外山五郎の逃避先を訪れたことは既述の通りだが、英美子は同一八日に再び別府貫一郎を伴ってその隠れ家を訪問している。この時、外山は在宅していたが、執拗に追い掛けて来る英美子に腹を立てたのか、彼女目掛けて熱湯の入ったヤカンを投げつける。彼は女性に対してまったく媚びることなく、冷徹な態度で接することで知られ、そのような潔^{いさぎよ}い姿勢が大いに気に入っていた英美子であるが、パリまで行って妻まじい歓迎を受けたものである。幸いちょっとした火傷^{やけど}で済み、大事には至らなかったが、それにしても常軌を逸した憤激ぶりで、当然のことながら英美子が受けた衝撃は計り知れない。

平林たい子はこの“事件”についても、現場に居合わせた別府から詳しく事情を聴取している。それによると「(外山は：筆者挿入)相当憤っていたらしい。ある瞬間、ストーブにかかっていたやかんを、いきなり英美子さんに向けて投げつけた。英美子さんは足にやけど⁽²⁹⁾をした」という。それで

は、この日の「小遣い帳」に如何なることが書かれていたのか大いに気になるが、余程ショックが大きかったのか、そこには「別府氏とアルジャントユへ行く。不快此上なかつた。とてもさむい。少し風を引いた⁽³⁰⁾」とだけしか記述されていなかった。

この事件の後、「毎日々々アパートマンの七階の部屋で雑文を書き、巴里へ送って来た金を逆に日本の両親のもとへ送らなければならなかつた⁽³¹⁾」といった生活が日常化する。しかし、外山から受けた酷い仕打ちや大陸特有の重度な風邪による体調悪化などが重なり、芙美子のパリ生活は惨憺たる状況に陥る。さらに、それに追い討ちを掛けるかのように「栄養不良の一種で鳥眼^{とりめ}になってしまいました。夜分になると視力が衰え、何をする勇氣もない⁽³¹⁾」というから、まさに弱り目に祟り目である。

4. 別府貫一郎や森本六爾との交遊、そして再び外山五郎の登場

別府貫一郎は芙美子がパリに到着した時から、終始、彼女の相談に乗り、世話をし続けてきた功労者である。しかし、二人の関係は外山訪問を境にして隙間風が吹き始める。芙美子と外山との仲介を務める羽目になった別府にとって、それはプライドが許さなかつたのかもしれない。いずれにせよ、芙美子と徐々に疎遠になり、それに伴って彼女も「別府氏もいゝ人だが、ただ主観でものをきめたがる人だ、尾崎女のやうなところがある。巴里女に引つか、つて六千フランほどつかはれたそう、これはエピソードだ。今はまじめで、描いておられるが、日本人間にはあまりよく言われてゐない。皆あの人の性かくがわざはいするのだらう⁽³²⁾」と次第に辛口の人物評を下すようになる。

当初、画家として高く評価し尊敬もしていたのに、このように彼の性格の悪さを明け透けに語るようになり、それはパリ滞在中、絶えることはなかつた。何故、芙美子がこのような態度を取るようになったのか謎に包まれているが、一説には芙美子が『放浪記』の成功で、彼に対して傲慢不遜な態度を取ったため別府がそれに反発した、あるいは親密になった二人の

間で何か男女の機微いやに関わる厭な出来事が生じたのではないか—といった憶測が挙げられている。いずれにせよ、二人が修復不能の関係になったことは事実で、それが『巴里日記』の記述に影響を及ぼしたに違いない。

その一方で、夫宛てに出した手紙に登場する男性たちは、大体において良く言われえないという側面もある。つまり、夫を安心させるため、実際、この手紙では夫に対して「淋しいだらうがケツパクでゐてほしい そう命(32)じる」と命令している。しかも、この「ケツパク」という言葉にわざわざ丸印を付けて強調している。これは「潔白」、つまり浮気は厳禁という意味で、婉曲的な言い回しではあるが、裏返せば「私は潔白」ということを言いたいのである。

いずれにせよ、この別府に対する記述は「巴里の小遣い帳」や「ボン・マルシェ日記」では一月四日まで頻繁に登場しているが、それ以降は途絶えている。その別府と入れ代わるように、頻繁に登場するようになるのが考古学徒の森本六爾である。「巴里の小遣い帳」には一二月二六日が初出で、「ボン・マルシェ日記」には二月五日まで毎日のように顔を出している。また、『滞歐記』には一九三二(昭和七)年一月一日に初めて「M」というイニシャルで登場しているが、『巴里日記』には何故か、その名前は無い。

この森本は一九三一(昭和六)年四月に日本を発ち、シベリア鉄道経由で美美子より半年ばかり前にパリに到着している。中学卒業後、代用教員をしながら独学で考古学の研究をしていたが、目ぼしい学歴が無かったためはく箔をつけるためにフランス留学を決意したらしい。そして帰国した翌年、弥生時代農耕社会説を発表して一躍、脚光を浴びることになる。

美美子がパリで出会った頃の森本はまだそのような存在ではなく、彼女と同様、フランス語も満足に喋ることの出来ない少壮の学徒に過ぎなかった。しかも、すでに二人の子供がいる既婚者で、教員をしている妻の実家が留学費用を工面してくれたため、やっと留学かなの夢が叶ったという苦勞人である。ところが、そのような事情に縛られることなく、森本は同い年の

芙美子に心を寄せ、恋の虜になるのである。

最初に登場した「小遣い帳」には、「夕方顔氏森本氏達と支那めしをたべ、サンミツシエルを散歩する⁽³³⁾」とある。この顔氏は森本が親しくしていた台湾人留学生である。そして、その三日後の二九日には森本、田島隆純と一緒に東洋美術専門美術館「ミュゼ・ギメ」を訪問したと書かれている。この田島氏は真言宗の学僧で、大正大学で教鞭を執っていたが、この時はパリ大学に留学中で森本の知り合いだった。

この美術館で三人は日本文学研究者、セルゲイ・エリセエフに会っている。彼はロシア系ユダヤ人で、夏目漱石を師と仰ぐ東京帝国大学の卒業生。一九二一(大正一〇)年にパリに移住し、当地で志賀直哉や谷崎潤一郎たちの作品を翻訳出版していた。そして芙美子たちに会った翌年、アメリカに渡り、ハーバード大学で「日本学」を講じている。その時、彼の授業の受講生の中に若きエドウィン・ライシャワーの姿があった。

このように、森本は自身が寄宿している日本人留学生用の大学都市日本館の同宿者たちを連れて頻繁に芙美子宅を訪れ、その都度、街中のカフェやレストランに繰り出して楽しいひと時を過ごしている。その意味において、芙美子は束の間に過ぎないが、忌むべき「外山事件」を忘れることが出来たのかもしれない。この頃、未投函に終わった夫への便りに「うどんがたべたい。なつたう(納豆：筆者注)がたべたい。さんまはうまいだらう。体を元気にしてゐなさいよ⁽³⁴⁾」といった内容が書かれており、幾分、平常心に戻ったことを感じさせる。

そして一九三二(昭和七)年一月一日、つまりパリで初めて元日を迎えることになるが、芙美子はその朝「オキシフルで口を洗ひ、高い窓から四方拜をした⁽³⁵⁾」と新たな気持ちになっている。午後になると、さっそく森本が田島を連れて新年の挨拶にやって来る。『旅だより』では、「晝から、考古學者M氏、佛教研究家T氏、たちに誘はれて、オーダンと云ふ、東洋びいきの佛蘭西人の家へ行く。出された緑茶の中には京都の梅干が一つ沈んでゐた。オーダン氏の奥さんは日本人で、京都の人だと云ふ事であつた⁽³⁵⁾」と

ある。そして、そこを辞去して外に出ると「雪が降つてゐる」ことに気づき、改めて「今日は元日なのだ」と感慨を新たにし、三人でサン・ミッシェル近くのオデオンで、ロイドの『東洋の秘密と云ふ喜劇を見る』⁽³⁵⁾のである。

このように、美美子の身边には森本の姿が日々、色濃く投影されるようになり、彼女をパリにまで駆り立てた外山とはあの事件以来、絶縁状態になっていたのか、まったく登場していない。ところが驚くべきことに、一月二日に美美子と外山はパリ市内で会っているのである。

「夜、G氏(筆者注：外山のこと)來訪、思ひがけない人の來訪だけに、とまどひした気持ちで何を話したのかみんな忘れてしまった。一緒に外出、暖い夜だ」「リラで茶を呑む。藤村氏(筆者注：島崎藤村のこと)がよく來られたカフェーだと記憶してゐる。品がよく静かであつた」「夕飯は佛蘭西料理の安飯屋で済まし、二人で、南アフリカの實寫を見る。フランス飯屋も、シネマも別勘定で別れた」⁽³⁶⁾。

これは『旅だより』に書かれていたものだが、この件に関して『滯歐記』では「夕方、手紙を出しておいたのでT氏來訪」とある。つまり、前者では「思ひがけない人の來訪」「とまどひした氣持」、さらに当日の「ボン・マルシェ日記」でも「夕方外山氏來訪。仕事をしたい気持ちでいつばいなのだが」と來訪が突然のことで、それに戸惑っているような記述になっている。しかし、当日の様子から美美子が誘った可能性も否定できない。

いずれにせよ、二人はカフェ「リラ」で「ほだい樹の花の茶」を飲み、「スープにキモに、ほうれん草にビスケット」の夕食を摂った後、仲良く映画を鑑賞している。二人は仲直りしたのか、それともせめて正月ぐらいは一緒に過ごそうということだったのか、真相は藪の中と言わざるを得ないが、この再会によって美美子の中で風前の^{ともしび}灯だった外山に対する恋心が再燃することはなかった。それは、この日のカフェ、レストラン、そして映画代のすべてが別勘定(割り勘定)だったことに暗示されていると言えなくもない。

5. 「女の腐ったような」「絶交」「来たら水かける」と森本に罵詈雑言ばりぞうごん

その外山に負けじと言うべきか、『滞歐記』の翌三日の項には「夕方、学者のM氏(筆者注：森本のこと)来訪，一緒に出て，又街を歩く」「モンパルナスのロトンドで茶を飲み，M氏はサン・ミツシエルの日本料理フジへ，わたしは，ひとりサン・ミツシエルの学生街を，ぼんやり散策しながら帰る」，さらに翌四日にも「M氏，ジヤン・コクトオの電話テレフォンと云ふ本持つて来てくれる」とある。

ともかく，森本はマメで執拗なのである。しかし，その根底には親切心があったわけで，そのお礼の意味もあって，芙美子は六日の夜，森本と田島を自室に招き，手料理たいの鯛の焼き物と吸い物，カブの新香，そしておむすびを振る舞っている。そのシーンは、『滞歐記』にも「夜，何時も御馳走になるので，M氏，T氏に御飯を招待する。むすびに鯛の焼いたの，マカロニ，鯛の吸物など，食卓の話は故里の山河のこと，紅葡萄酒パン・ルウジュが案外飲めて，三人の望郷人は，ひそやかに歌をうたつた」と登場している。

このような歓待を受けた森本は，芙美子が自分に好意を抱いていると勘違いしたのか，それとも愛の告白をしようとしたのか，翌七日の早朝，芙美子の部屋を訪れている。この訪問にはさすがの芙美子も驚き，「何の事だと思つたら昨夜のろけを云つて済まないと云ふ事だつた。馬鹿〜しい。男と云ふものは，ましてエトランゼのせいとか，少々ぬけてもゐる。私が好きで仕用がないのだと云ふ事だ。へえ！こんなやぶれた女(37)がね」と呆れ果てている。余程腹が立ったのか，このことは『滞歐記』にも「早朝M氏来訪。学者肌の人だが，困つた事だ」と書いている。

しかし，これが芙美子の嘘偽りの無い気持ちだったにも拘わらず，幼い頃に散々，苦勞したこともあってか，それを面と向かって相手におつけて，人間関係を壊すようなことはしなかった。実際，この時も応対している最中に顔氏が来訪したため，三人連れ立ってチャップリンの映画を見に行っている。このような芙美子の煮え切らない態度が森本の勘違いを増幅させたのか，翌八日の朝にも彼は芙美子を訪問している。芙美子はそれに腹を

立てないばかりか、この日も一緒に外出してカフェでひと時を過ごしている。そして別れた後、驚愕すべきことにこの日の夜、森本は再度、芙美子を訪れるのである。

芙美子の心中を斟酌できない森本の鈍感性には驚かされるが、さすがに当日の「ボン・マルシェ日記」は森本に対する罵詈雑言ぼりぞうごんで満ち溢れている。「朝森本氏来訪ます〜不快だ。女のくさつたみたいだ」⁽³⁸⁾「八時すぎ、また森本氏来訪、此男このとは絶交する必要がある」⁽³⁸⁾。

しかし、森本六爾の芙美子詣では止まるところを知らず、二日後の一〇日にも芙美子を訪れたため、堪忍袋の緒が切れた彼女は「来らば水かけん」と追い返している。遂に本性ほんしょうを露わにしたのである。

そして翌日の一日、芙美子が外出先からホテルに戻ってみると、その森本から三本の白いリラの花が届けられていた。その鉢植えの花には、名刺と「此花が御部屋を訪問いたします。どうか水をぶっかけて下さい。出来たら根の方が結構です」という手紙が添えられていた。これについては、森本も「リラの花三本、葉二本、18フラン、ホテルの留守に届ける」と書き残している。当然のことながら、芙美子は「こんな事をする男はよけい厭だ」⁽³⁹⁾と嫌悪感を掻き立てられるが、ちょうどその時に喧嘩をしてしばらく疎遠にしていた別府がやって来たものだから、彼もそのとぼっち(40)りを受けたのか、芙美子に「きゆうくつな人だ」と書かれることになる。

このように散々だったその日の翌日、信じられないことに当の森本がまた訪ねて来る。リラの花のプレゼントで芙美子が機嫌を直したかもしれないと思ったのか、その来訪の動機は不明だが、芙美子がそのようなことで懐柔されるはずもなく、当日の「日記」ではこの訪問を「不快」⁽⁴⁰⁾と憤っている。つまり、芙美子にとって森本は親切で重宝すべき存在だったかもしれないが、「男」として意識することはまったく無かった。ところが、森本はそのことに気づかないで求愛行動に走ったため、彼女に「嫌な奴いや」と嫌われることになったのである。

そのような鬱陶うつとうしい気分を払拭かつしよくするため、芙美子は一月一四日は朝から

外出して近くのカフェに陣取り、原稿の執筆に専念する。その時、「隣席には、詩を校正してゐる老人がゐた。キヤフエを啜りながら、校正に飽いて来ると、繪を描きながら、その老人は唄をうたう」と如何にもパリらしい光景に出くわし、芙美子は「朝のカフェーはまことに教室のやうに新鮮⁽⁴¹⁾だ」とそれまでの厭^{いや}な出来事を忘れて元気を取り戻している。

そして午後になると急に思い立って、正月に再会したばかりの外山五郎をアルジャントゥイユに訪ねる。『旅だより』によると、その時の様子は「G氏(筆者注：外山のこと)は病氣上りで、一人ストーヴにあたつてゐた。雑談四時間、山や繪⁽⁴¹⁾の話をして歸へる。日本にゐた頃の氣持がカラリとして、大變さわやかだ」とあり、ヤカンを投げつけられたことが信じられないほど和^{なご}やかなひと時を過ごしている。「日記」にも同様のことが嬉々として綴られており、二人の間で恋が再燃したかと思われる部分もある。しかし、その後の経過を見ると、この時が頂点で、これを境に芙美子の恋情は潮が引くように衰微の一途^{たど}を辿るのである。

一六日は「寒いながらも、太陽が出てゐた」ので外出し、「一人、マドレーヌの寺を見に行く。實に女性的で、聖母寺より親しめて好きであつた。圓柱をコツンコツン叩いて見る。扉を押して中へ這入ると、深々と谷間のやうに静かで、水兵服の少年が二人椅子の背に凭れて祈つてゐた。まるで即興詩人の主人公のやうに可憐であつた。私も椅子の背に額を押して、いつとき動かないでゐると、悲しくもないのに、泪があふれて仕方がなかつ⁽⁴²⁾た」と優美なマドレーヌ寺院が醸し出す詩情に酔い痴れて感激の涙を流している。

そのような素晴らしい感動を胸にホテルに戻り、その余韻に浸っていると、また森本と田島のコンビが懲りもせずやって来る。森本の「芙美子愛」には尋常ならざるものがあり、芙美子はこの日の日記に「どうもやりきれない⁽⁴³⁾」と書いている。ところが、それほど嫌っているにも拘わらず、実はこの日も三人でフランス文学者の渡辺一夫に会いに行っている。そして、四人連れ立ってジャン・コクトーの映画『詩人の血』を鑑賞している

のである。

その翌日の一七日も森本は知人を伴って来訪し、三人でクリニャンクルの蜜^{のみ}の市の見物に出掛けている。このように、森本はパリ滞在中の様々な日本人を美美子に紹介し、その結果、彼女のパリ生活^{にぎ}に賑わいと彩りを与えることになった。その意味では、男女という関係において嫌悪感があったにせよ、森本は実利的に貴重な存在だったのである。

このように、美美子は毎日のように森本やその友人たちと交遊する一方、語学学校「アリアンス」でフランス語の勉強もしている。しかし、フランス語の文学作品を原書で読破し、流暢に喋ることが出来た永井荷風や中村光夫、遠藤周作といった文人たちと比べると、美美子の「フランス理解」は大衆からの視線という特徴があったにせよ、如何せん、それは実体験に基づく感覚、印象の範囲を出ること叶わず、皮相的だったことは否めない。それ故、深奥に迫るような「西洋観」を構築できずに終わるのである。

6. パリに見切りをつけ、自殺すら予感させる心境でロンドンへ

このような日本人ばかりとの交流の日々では埒^{らち}が明かないと考えたのかどうか、美美子は翌一八日、生理になった身体をベッドに横たえながら、急遽、ロンドン行きを決意する。そこには代り映えのせぬ森本たちとの交流から抜け出したいという思いがあったのかもしれないが、それとは別に、月極めの滞在契約をしているホテルがちょうど二カ月満期を迎えるという事情もあった。せっかくヨーロッパにやって来たのだから、新天地であるロンドンに渡って原稿の執筆に精励し、巻き返しを図ろうと考えたのである。

思い立ったらすぐ行動に移すのが美美子の性分^{しょうぶん}で、翌一九日に銀行へ行って一五ポンドと一二〇フランの預金全額を下ろしている。『滞歐記』にはこの日、「M氏(筆者注：森本のこと)お別れの記念だと云つて三十九法^{フラン}の肩掛けをコンコルドで買つてくれる」とあるが、森本には事前にロンドン行きを打ち明け、渡航手続きや当地のホテルの予約などでお世話になっ

ていた。

そして翌日の二〇日、イギリス入国のビザを取得し、夫に「朧月二十四日に巴里を引上げて英国へ渡ります」「巴里に足かけ三ヶ月得るものなし、足にまかせて歩く⁽⁴⁴⁾」と記した絵葉書を出している。

本来なら、イギリスで心機一転、作家としてひと旗揚げようと意気込むものだが、渡航を前にした芙美子の心中は意外なことに暗澹たる様相を呈していた。それは「ボン・マルシェ日記」に、「どうせ日本へは帰へれないだらう。もうあらゆるものへあきらめがついた」「すてばちではない。元気でジケツすべきだ。緑さん(筆者注：夫のこと)や！お母さんやお父さんや、芙美子是不幸者でありました」「外国へうぬぼれて来たのだが、ざまを見る！⁽⁴⁵⁾」と殴り書きされていたことから明らかである。

まるで自殺^{ほの}を仄めかす遺言のような内容であるが、その鬱屈した気持ちの背景には「パリ滞在」が充実していなかった、失敗だったという認識があったからではなかったか。その心境は、煌びやかな「花の都」で享樂的な生活を存分に楽しみ、それを名著『ふらんす物語』で滔々^{とうとう}と謳い上げた荷風のそれとは天地の相違がある。実際、渡航の動機だった外山五郎との恋も成就すること叶わず、作家の本分である原稿執筆も遅々として進まぬ現状を目の当たりにして、芙美子が「このパリで一体、何をしていたのか」という焦りと悔恨^{さいな}に苛まれたとしても不思議ではない。それに加えて、ロンドンに渡ったところで、そのような状況が好転する保証は何処^{どこ}にも無いという悲觀的な気持ちがあったのかもしれない。

ところがパリ出発直前、夫、緑敏に出した手紙ではそのような悲壯な気持ちは微塵も見せず、別府や外山のことを次のように痛烈に皮肉っている。「いよ〜巴里を去る日です」「別府氏とは不快な事があつてケンカしちつ(や)た。第六感と云ふあだ名があるそうだが、一寸世話をやきすぎる。あのひとは東京の頃も少しチカチカしてゐたが、巴里ではひどい」「外山君も元気らしいが、絵はあまり描いてないやうだ。巴里で三度会つた⁽⁴⁶⁾」「春頃の私の気持ちを笑つてやりたくなつたぐら이다。それで判るでせ

⁽⁴⁷⁾う」。そして、このように彼らと交流を重ねているものの、それ以上の関係はまったく無いことを強調するかのように、「私の体はまるで尼さんのやうだ、ケツパクすぎて透きとほるやうだ⁽⁴⁸⁾」と付け加えている。毎度のことなので、それを読んだ緑敏は苦笑していたに違いない。

そしてパリ出発の一月二三日、あれほど嫌っていた森本がやって来て、送別の意味を込めて芙美子にポーランド料理をご馳走している。その後、出発駅である北駅へと向かい、芙美子はロンドン行きの列車に乗り込むのだが、ホームには森本のほか松尾邦之助も見送りに駆け付けていた。しかし、パリ到着時にお世話になった別府にはこのロンドン行きを知らせていなかったこともあって、そこに彼の姿は無かった。

このようにして芙美子はパリから夜行列車、さらにドーバー海峡を船で渡ってイギリスの地を踏むのだが、当日の「ボン・マルシェ日記」には「風よ吹け！雨よふれ。夜中、港につく、暗い雨に、海峡を渡る船が牛のやうだった⁽⁴⁹⁾」と少々、荒^{すさ}みを帯びた口調で書かれている。二四日にロンドンに到着し、森本が手配してくれたケンジントンの安ホテルに投宿している。以来、約一ヵ月間にわたるロンドン滞在中、ここが芙美子の根城となるのである。

ロンドン生活は一応、順調にスタートしたようで、翌二五日、夫に送った手紙には「英国は落ちつける。巴里のやうに植民地的でないのがいい⁽⁴⁷⁾」とある。そして、何よりも街中の看板が英語で書かれているため、生活するにはパリよりも便利と書いている。

また『旅だより』では、次のように芙美子らしい観察が綴られている。「静かな街だ。一寸日本のどこかに似てゐる。京都のやうな氣もする」「巴里と違って、おそろしく背の高いガンジヨウな巡査が眼につく。王様のゐる街だ」「倫敦へ来て初めて英語と云ふものゝ、むつかしさが判つた。少々位発音がルーズでも顔色で知つてくれる巴里と違って、言葉がハツキリしてゐないと、倫敦は手も足も出なくなる⁽⁵⁰⁾」。その一方で与謝野晶子と同様、「脂氣のない街だ。藝術的な雰圍氣さらになく、女達ときたら細く

てポキポキで青竹色のお召物ときてゐるのでうんざり、巴里を離れると、女達がみんな汚れて見える⁽⁵¹⁾」とイギリス人女性のセンスの無さを腐している。

滞在しているホテルについては、そこで出される朝食が気に入らなかったようで、「ひとり旅の記」の回想によると「^{ロンドン}ロンドンで二ヶ月ばかり下宿住いをしたことがあるけれど、二ヶ月のあいだじゅう朝御飯が同じ献立だったのにはびっくりしてしまった⁽¹⁵⁾」「オートミール、ハムエッグス、ベーコン、紅茶、さすがに閉口してしまつて、いまだにハムエッグスとベーコンを見ると胸がつかえそうになる時がある⁽¹⁵⁾」とある。ロンドン滞在は一月足らずだったから、この「二ヶ月ばかり」という記述は芙美子特有の誇張である。

そして驚くべきことに、到着二日後の二六日、その安ホテルに森本が訪ねて来る。『滞歐記』には「日本へ帰るM氏^{ロンドン}ロンドンへ寄つたからと云つて尋ねて来られた」とあるが、実際、森本は急遽、就職先が決まつて、ロンドン発の船で帰国することになったのである。このホテルも彼が予約手配したもので、芙美子に別れの挨拶をするために訪問するのは決しておかしくはない。この段になって、芙美子はようやく「M氏にも巴里では色々の感情もあつたが、結局親切な人でもあつた」と評価しているが、その男としての心根は忌み嫌っていたようで、末尾には「だが何としてもイカンな事である」と付け加えている。

ロンドンから夫に宛てた手紙には、先に帰国する森本にレコードやパイプ、ネクタイなどの入ったトランクを託したと書いているが、ここでも「(森本は：筆者挿入)学者だからモツサリとした人だ。すかんところだ⁽⁵²⁾」と批判するのを忘れていない。その森本は一月二九日、当地発の「靖国丸」で帰国の途に就くが、当日の「ボン・マルシェ日記」にも「やれ〜だ。まるで蛇みたいにくね〜した男だ。好かぬところだ⁽⁵³⁾」と書いてる。このように、芙美子にとって森本は生理的に相性の合わない相手だったわけだが、そのことを知ってか知らずしてか、森本は帰路、ジブラルタルからわ

わざわざ芙美子宛に絵葉書を送っている。

7. 「霧の街」における楠山義太郎との出会いと新しい恋の誕生

芙美子がロンドンに到着したのは真冬で身も凍るような寒さだったが、それでも好奇心が旺盛な芙美子は観光客のようによく出掛けている。その中でも世界史を彩る大英博物館の膨大な所蔵品には驚嘆の声を上げ、「英国の博物館だけは、⁽⁵⁴⁾ 巴里のルーブルでもかなわない」と褒め讃えている。このほか、マルクスの墓やテムズ川の魚市場、ユダヤ人街、さらにはピカデリー広場やイーストエンド、そして芝居小屋などにも小まめに足を運んだほか、オックスフォード大学にも行っている。

その一方で、ロンドンではパリの^{かまびす}ように喧しい取り巻きがいなかったこともあって、静かな環境の中で執筆に専念することが出来た。その過程で垣間見たロンドンの印象は、「倫敦の街は樹木がないせい好きではない。霧が深い。まるで谷の底を歩いてゐるやうだ」⁽⁵⁵⁾「倫敦を浅い目で論じる事は厚かましいことですが、要するに、芝居も、文学も、儀礼も英国はもう田舎っぺの感じ」⁽⁵⁶⁾「文学だって、現代の英文壇なんぞいったい何でしょう？、日本の方がよっぽど華々しい」⁽⁵⁶⁾と相変わらず辛辣なものだった。

流行作家が洋行した際、古今を問わず全国紙の現地特派員が何かと世話をするのが慣わしである。実際、芙美子はパリで読売新聞の松尾邦之助から様々な便宜を図ってもらっていたが、このロンドンでは大阪毎日新聞の特派員、楠山義太郎がその任を担うことになる。

芙美子より六歳年上の楠山は海外生活二〇年ということもあって、その服装や身のこなし方は欧米人にもけっして引けを取らない洗練されたもので、芙美子がこれまで出会った日本人の中でもっとも魅力的な知的国際人だった。パリでは、親切ではあるが鬱陶^{うつとお}しいほどしつこく森本に付き纏^{まと}われた後ただただに、楠山の^{まっそう}颯爽とした姿に芙美子はたちまち魅了されてしまう。

一方、楠山の方も芙美子に満更ではなく、二月二日の初対面以降、二人

は頻繁^{ひんぱん}に食事や観劇、市内散策、さらにはドライブも楽しむようになる。「恋は月に一回」をモットーとする恋愛師、芙美子の面目躍如たる男性遍歴的一幕である。

そのような折、パリの外山五郎から芙美子の元に通の手紙が届く。「ボン・マルシェ日記」によると「巴里のT氏より、コロのエハガキ一通、伊太利旅行より戻り、これより南仏へ向ふと云ふ通信なり」とある。しかし、芙美子には既に楠山という新しい恋人が出来ており、外山はすでに「過去の人」以外の何者でもなかった。

二月一四日には夫に手紙を出しているが、執念深いことに「(ロンドンからパリに戻ったとしても：筆者挿入)別府なんかには会ふまいと思つてゐる、あんな不快な奴はない」「実にいやだつた⁽⁵⁷⁾」と再び別府攻撃を展開している。嫌いでも御し易^{ぎよ}い森本と違って、別府には余程、我慢ならぬ出来事があったのかもしれない。そして、楠山と一緒にいるロンドンが楽しくなったのか、「私がかへつたら、——うんと美味しい西洋料理をくはしてやる。ロンドンでも大分おぼえた⁽⁵⁷⁾」、さらに「ロンドン⁽⁵⁷⁾はまつたくいゝところだ、どこの都会よりも田舎で、流行がなく⁽⁵⁷⁾落ちてゐる」と一転、褒め讃えており、夫ならずとも、その言に翻弄されずに付いて行くのは並大抵のことではない。

このように、芙美子はその時々⁽⁵⁷⁾の気分で目まぐるしく評価が変わるといふ癖があり、当該地の歴史や社会的背景を綿密に調べたうえで評論する与謝野晶子のそれとは明らかに趣^{おもむき}を異にする。つまり、芙美子のイギリスやフランス観は「下駄で歩いた巴里^{パリ}」に象徴されるように、実際に体験した日々の出来事や出会った人に対する好悪、つまり偏^{ひとえ}に個人的で情緒的な感覚に基づいている。それは確かに皮相的であるかもしれないが、読者にとっては分かりやすく、共感を得やすいという特徴がある。実際、このロンドンで芙美子の筆は進み、雑誌「改造」や「中央公論」「婦人サロン」に計八〇枚もの原稿を書いて送稿している。

このように、すっかり元気を取り戻した芙美子は大好きなパリに戻って

再起を図ることを決意し、一九三二(昭和七)年二月二日の夜、楠山たちの見送りを受けてロンドンを発っている。日本を出発してからパリに二カ月間、そしてロンドンに約一カ月間滞在した後、再びパリに舞い戻るのである。

8. “室内火災”の衝撃と外山との訣別、そして楠山への傾倒

二月二日午前五時、列車でパリに帰って来た美美子はその足で十四区ダンフェール・ロシュローへ向かい、広場に面したオテル・フロリドールに宿泊する。このホテルには読売新聞の松尾邦之助夫妻が住んでおり、宿泊費は少々、高かったが、部屋に敷かれている絨毯じゆうたんが気に入って滞在を決める。窓からの眺望も抜群で、「窓を開けるとモンパルナスの墓地が眼の下で道路には花屋がもう野から取つて来たばかりのやうなピツサンリの花を花車にあふれさせてある。リラの花もミモザもさながらの巴里色だ」と早くも華やかなパリの雰囲気に酔い痴れている。

四日後の二六日には松尾夫妻とともに日本人絵師の家に招かれて和食をよばれ、望郷の念を新たにしている。その頃、夫の緑敏に出した手紙では「私も十一月出たきり、リヨクさんが恋ひしい。何度も云ふやうだが、血がとてもキレイになつたゞらう。あまさんのやうな生活だ」「可愛いリヨクさんよ。辛いだらうけど、あともすこし、私だつて会ひたい(58)のよ」と夫への甘い言葉、さらにその証しとして「私の可愛いくちびるをおくりま(59)す」と書いて、そこに自身の紅い口紅のキスマークを添付している。すっかりパリジェヌに成りきった気分である。

しかし、そのような夫への愛情あふれる言葉とは裏腹に、楠山義太郎に対する熱い想いは募る一方で、三月一日にはジュネーブで開催中の軍縮会議の取材に向かう楠山がロンドンからパリに到着する。そして、スイス行き列車の待ち時間を利用して二人はサン・ミッシェルで食事を共にし、その後、美美子は北駅まで付いて行って彼を見送っている。

翌三月二日から美美子は風邪気味となり、五日には遂に声が出なくなっ

ている。当日の「ボン・マルシェ日記」には「夜、ニームの中へ米を入れて、アルコールランプで焚いてみた。福神づけでたべてうまかつた。侘しとも侘し⁽⁶⁰⁾」とある。余程、体調が悪かったのか、二日後の七日、芙美子は部屋で“火事”を起こしている。当日の「日記」によると、その顛末は以下の通りである。「朝、アルコールで飯をたいてゐたら、油がなくなつたので、消して油をさすと、ビンの中へ火がうつゝて、巴里まで来て火事をつくるかと心配した。タツピーにまで火がうつる、籐椅子も燃へる。私は呆然として袂で叩いた。ヤレ〜やつと消えたが、病気なので、躰中冷汗でびつしより。鍵をしたまゝぐつたり寝ころんで、一日何もくはなかつた⁽⁶¹⁾」。

ボヤで事なきを得たが、体調の悪さが手元を狂わせたのだろう。そして、「紅いタツピーの焼こげには、頬紅をまいといた⁽⁶¹⁾」と書いているが、これはタツピー(筆者注：絨毯のこと)の焦げ跡に頬紅を撒いて痕跡を隠したというもので、生活力溢れる芙美子ならではの機転である。しかし、燃えてしまった籐の椅子の方はどうにもならず、『旅だより』によると、ホテルのガルソンが「市場で同じものを買って来てやる」と助け舟を出してくれたという。

その“火災”のショックもあって体調は一層悪化し、当日から一三日まで寝込んでしまう。病臥中の一〇日には、ジュネーブの楠山から絵葉書が届く。それで多少は元気が出たのかも知れないが、「ボン・マルシェ日記」には「私は此男には少しまいつてゐるが、参る気持ちには素的だ。只それだけでいいのではないか」と病臥しながらも、楠山への恋について熱い想いを巡らせている。

その間、フランス文学者の渡辺一夫が見舞いに訪れ、弱気になっている芙美子に「パリまで来て風邪で寝ているくらいなら、いっそ死んでしまいなさい」と一喝している。これは、芙美子を励ます一種のショック療法と思われるが、三月一五日、夫に送った絵葉書では「病臥約十日あまり。非常にくるしいものであつた。こつちの人達は、金で動く奴たちばかりでハ

ク情者がそろつてゐる。やつとおきられるやうになつた⁽⁶²⁾」と相変わらず憎まれ口を叩いているが、この頃、やつと回復したと思われる。

そして、その二日後の一七日の『巴里日記』には「ホテルの入口でアルジャントユのT氏に出逢ふ。このひととは三カ月ぶりなり」「近々日本へ帰られる由なり」「二人で遠くデユピユイトラン街まで散歩。私はT氏と二人で、たゞ風の中をぼんやり歩いてゐるだけだつた」とある。このT氏が外山五郎であることは言うまでもないが、さらに一九日の項には「T氏が部屋の外に立つてゐた」「チロルの山の古いレコード三枚、醤油瓶、白水社の和仏字典を私に買つてくれと云ふ話なり。私はたゞ呆れてつつ立つてゐるのみ。をかしい気持ちだつたが、気持ちよく買つてあげる事にする。T氏金をポケットに入れて帰る。一人になると、私は笑ひがとまらないほどをかしくなつてきて、笑ひころげるなり。四フランの醤油を巴里で買ふなぞとは思はなかつた」と書かれている。

つまり、外山はパリを引き揚げるに際し、身の回りを処分してそれらを金銭に換えようと芙美子を訪問して、辞典や醤油を買い取ってくれと頼んだのである。かつて恋仲だった関係からは想像しづらいあまりにも実利的な話ではあるが、『滞歐記』や「日記」にはこの荒唐無稽ともいふべき件^{くだり}はなく、真偽のほどは不明というしかない。

三月二日には、ジュネーブからロンドンに戻る楠山が再びパリで途中下車して芙美子を訪ねている。当日の「日記」には「楠山氏来訪、チョコレート貰ふ。好きな人だ、一寸困る。夕方六時かへる。呆んやりする」「主人に対して相済まない事だ。あゝ助けてくれだ⁽⁶³⁾」とある。つまり、このまま行くと二人は取り返しのつかない関係に陥ってしまうという予感がしたのであろう、それで夫に対して「申し訳ない」という言葉が出て来たわけで、それほど芙美子は楠山に心惹かれていたのである。

9. 憂愁^{えみ}の微笑^{たた}を湛^{せい}えた白井晟一^ちの登場で灼熱^{とりこ}の恋の虜に

ところが、「恋の狩人」である芙美子の前に、その楠山の存在が吹き飛

んでしまうほど魅惑的な男性がまもなく現れ、灼熱^{ほのお}の恋の炎に身も心も焦がすことになろうとは、この時の芙美子は知る^{よし}由もない。

それは四月一日のことである。この日、芙美子は詩人で作家のフランシス・カルコを訪問し、持参した歌麿の遊女の絵を贈っている。大いに喜んだカルコは自作の著書三冊と、その場で描いた自画像を彼女にプレゼントするが、その面会の通訳をしたのが、芙美子より六歳年下のリヨン大学の留学生、大屋久寿雄だった。

カルコ訪問の後、芙美子は大屋と別れて帰宅する。そして、夕食のために再度、外出した際、立ち寄ったカフェで偶然、その大屋と出会う。その時、彼はひと際、人目を引く眉目秀麗な一人の日本人男性と一緒にいた。その人物こそが、パリ滞在中の芙美子を恋^{とりこ}の虜^{せいち}にしてしまう白井晟一^{せいいち}なのである。

芙美子の言葉を借りると、その白井は「立派な体格に黒のダブルの背広がよく似合った」「その黒い眼は憂愁に満ちていた」（『巴里日記』）という形容になる。さらに、この劇的な出会いについて、『滞歐記』では「スフレエーに寄り、こゝで又O君にあふ。O君、S君を紹介してくれる。S君建築をする人の由」とある。一方、実名で記されている当日の「ボン・マルシェ日記」では「スフレで、大宅（筆者注：大屋の誤記）君と白井君に会い、クーボツクで、オットカを呑み、ダンス場に行く。かへり二時」と書かれており、意気投合した三人はカフェを梯子^{はしご}し、さらにダンスに興じて午前様になったことが分かる。

これ以降、芙美子は白井に熱い想いを寄せ、恋焦がれ、毎日のように逢瀬を重ねて、五月一二日の夜、帰国のためにパリ・リヨン駅を出発する日まで激しく恋の炎を燃やし続けるのである。

それではこの白井晟一なる男性は一体、いかなる人物であったのか。彼は一九〇五（明治三八）年二月五日、京都生まれで、実家の白井家は代々、銅を扱う豪商だった。しかし、祖父の代に没落し、父の死後は東京の姉の嫁ぎ先である日本画家、近藤浩一路宅に寄寓していた。そして青山学院中

等部、京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)建築科を経て、一九二八(昭和三)年にドイツのハイデルベルク大学に留学する。その後、ベルリン大学に移るが、義兄の近藤がパリで個展を開催することになったため、その準備を兼ねて一九三一(昭和六)年三月からパリに在住し、作家、アンドレ・マルローたちと親交を重ねる日々を送っていた。そして、それから約一年後に芙美子と出会うのである。

翌四月二日の夜には、大屋がパリ大学留学中の美術研究者、今泉篤男を伴って芙美子を訪れ、三人で中華料理屋に向かい、そこで再び白井と合流している。この今泉は帰国後、美術評論家として名を成し、後年、京都国立近代美術館館長に就任した人物である。四人は前夜と同じカフェ「クーボック」に移り、そこで未明近くまでプロレタリア芸術について侃々諤々^{かんかんがくがく}の議論を交わしている。芙美子はそれについて十分な知識を持ち合わせていなかったため聞き役に徹したが、貴公子然とした白井の顔を見ているだけで十分、幸福だった。この日の「ボン・マルシェ日記」には「白井君に会ふ」「終夜呑み歩るく」「あゝ何もかもめつちやくちやになつてしまひそうだ⁽⁶⁴⁾」と楠山の時と同様、危険領域に踏み込むかもしれない激しい恋の予感が綴られている。

翌三日夕、白井と大屋は再び芙美子を訪れ、前日と同様、中華料理屋に行って夕食をとり、その後、カフェへ、さらに映画『三文オペラ』を見ている。そして、当日の日記には「三人で元気に夜更けの街を歩いた。一番楽しかった。——かへり十二時、仕方もない。どうすればいいのだらう⁽⁶⁵⁾」とある。

芙美子はその三日後の四月六日、かつて詩人の金子光晴や画家の藤田嗣治が滞在していたダゲール街二十二番地のホテルに引っ越している。当夜、白井は今泉篤男と一緒に芙美子を訪問し、三人連れ立って中華料理店で夕食を済ませた後、いつものカフェに場所を移して談笑している。この時もいつしか白井と今泉がプロレタリア芸術について激論を交わすようになり、それは延々と午前二時まで続くが、芙美子はこの日も聞き役に徹している。

ちなみに、白井は端正な風貌、さらに身なりも貴族かと思まごうばかりの洗練されたファッションセンスの持ち主だったが、実はヨーロッパのリベラリズムに強く影響を受けた筋金入りのプロレタリア派でもあった。実際、この年にパリを去った後、ドイツを経てモスクワに一年間滞在し、そのイデオロギーに深く共鳴してソ連邦に帰化申請をするが認められず、一九三三(昭和八)年にウラジオストク経由で帰国している。そして、帰国後は短期間ながら労働者支援運動をしている。一方、恵まれない幼少期を過ごした芙美子はプロレタリア文学に不信感を抱いており、終生、その姿勢が変わることはなかった。

そして八日の夜、白井は初めて一人で芙美子を訪ね、二人きりでレコードを聴きながら深夜に至るまで親密なひと時を過ごしている。勿論、芙美子の片想いに終わった恋愛も数知れずあったに違いないが、平林たい子が「芙美子には男を惹きつける魅力があった」と述べているように、白井も彼女に惹かれていたことは疑うべくもない。いずれにせよ、芙美子の恋は迅速で、あれほど恋焦がれた楠山の存在を容赦なく忘却の彼方に押しやる非情さも併せ持っていた。

翌九日の夜も白井と今泉が来訪し、芙美子は二人にすき焼きをご馳走している。二人を送り出した後、芙美子は「ボン・マルシェ日記」に「妙に楽しく死にたい気持ちでいつぱいになる。一人で広いベッドに寝ころんでみると、涙があふれた。あゝ誰にも会ひたくない。神様は、なぜ運命的に、人間をギシ〜いためつけるのだらう⁽⁶⁶⁾」と白井に対する狂おしい恋情に身悶えしている。この世で自分が唯一、安堵できる場所、つまり恋とはいささか趣を異にする最愛の夫、緑敏を裏切ることへの呵責の念が、この懊悩の根源にあった。

四月一二日には一人でリュクサンブール公園を散策しているが、その時「一人歩るきの考へ事は、みんな〜彼の人の事^か」「切なし」「これだけの心、これだけの力いつぱい。仕事どころでもない⁽⁶⁷⁾」と白井への熱い想いで胸を詰まらせている。また、この公園の彼方此方で恋人たちが抱擁をしな

がら愛を語り合う光景を目の当たりにして、「巴里の公園は一人でブラブラしていると、こっちが^{のぼ}上せあがってしまうほどだ。^{むつこと}睦言があっちもこっちも…」と羨ましげな言葉を記している。

この日の夜は白井と大屋が来訪したため、芙美子は二人に和食をふるまっている。ただ、いつもと異なるのは二人が辞去した後、しばらくして白井だけが密かに戻って来て、芙美子と二人っきりの夜を過ごしたことである。大屋も二人の関係に薄々気づいていたと思われるが、いずれにせよ芙美子と白井の仲はもはや引き返すことが出来ないほど親密になっていたのである。

翌一三日の夜、芙美子が外出先から戻って来ると白井が部屋の前で待っていた。もはや制御不能の恋愛急行列車のようなもので、芙美子も覚悟を決めたのか、この日の「日記」には「会へば胸あふれる思ひ」「何もかも考へる事、仕事の事親の事夫の事、こゝだけは別な少女の私でありたい。どんなムチでもうけませう⁽⁶⁸⁾」と綴っている。つまり、あらゆることを犠牲にしてでも、行き着く先に地獄が待ち構えていようとも、白井との恋に突っ走って人生を完全燃焼させるという凄まじいまでの決意である。

10. 愛を確かめ合ったに違いない白井との小旅行とその真実

このように二人は人目を気にする必要のない異国の空の下で逢瀬を重ね愛を育むが、奇妙なことに一日たりとも欠かさずに付けていた「ボン・マルシェ日記」の四月十八日の項は空白になっている。そして、翌一九日のページには「顔そむけたし。昔々の話はお互ひにおそろしい⁽⁶⁹⁾」などと書かれており、前日に二人の間で何か重大な出来事が起きたことを窺^{うかが}わせる。

これについて、今川英子は「空白の四月十八日こそ、芙美子と白井晟一との間にのっぴきならぬ関係が生じたと推察できる⁽⁷⁰⁾」と考える。その根拠については、その後続く二〇、二一、二二日付け「日記」の告白調の記述が重要な意味を持っているとして、「翌日の『顔そむけたし』は、芙美子の自責の念であろうし、翌々日には、モンパルナスのホテルのサロンで

コニャックを飲んだ成行きを『胸ゐたむおもいなり(略)Sのベルリンへ帰へる日もあと数日、何も云はない。何も云へない。誰が悪いと云ふ事もない。皆いゝのだから』と認めずにはいられない。二十一日には『心つめたし。心空し。心痛し。』と綴り、二十二日には『何もかけず国では皆、困つてゐるだろう、何としても私が悪いのです。全く何としてもだ。』とある。この短章は、晟一に激しくひかれながら、金縛りにでもあったように立ちすくむ芙美子の赤裸々な叫びであり、呻きととることもできる⁽⁷⁰⁾と述べている。筆者も同様の見解だが、関川夏央も「芙美子は『面喰い』である。『貴公子』のような青年との旅先の恋がプラトニックで『ふみとどまった』⁽⁷¹⁾とは、彼女の性格から見て考えにくい」と考察している。

いずれにせよ、二〇日以降の二人の行動を仔細に検証すれば、漠たる形であるにせよ、その「真実」が浮き彫りになるのではないだろうか。

その二〇日の夜、パリはどしゃぶりの雨だった。その中、芙美子と白井はモンパルナスのホテルのサロンでコニャックを味わいながら至福の時を過ごしている。その時の様子は、「ボン・マルシェ日記」に「胸ゐたむおもひなり。『旅から帰へつたらこゝへでも泊りませう』そう云つて二人で部屋を見せて貰つたりする。Sのベルリンへ帰へる日もうあと数日、何も云はない。何も云へない。誰が悪いと云ふ事もない⁽⁶⁹⁾」と書かれている。つまり、ここには白井がパリ滞在を終えてまもなくベルリンへ帰ること、そしてその前に二人が小旅行を予定していること、さらにその旅から帰った後、そのホテルに宿泊するために部屋を下見していることが書かれているのである。そして、このように二人の恋、それは不倫に他ならないが、大きく踏み出したことに対して、「誰が悪いと云ふ事もない」と覚悟を決めているのである。

そして二三日には白井と大屋の三人で中華料理店へ行き、その後、珍しく白井と別れて大屋とカフェで雑談し、午後九時に帰宅している。しかしその後、白井に電話をして呼び出し、二人で夜更けのパリ市内を散歩している。この時の白井の服装について、芙美子は「紺のガウンの上から金具

の美しい大きいバンドを締め」ていたと『巴里日記』に書いている。そして二五日には、バラの花を携えた白井が風邪を引いて寝込んでいる芙美子を見舞っている。この時の白井の様子は、『巴里日記』に「薄桃色の美しい沢山の薔薇の花を、白い箱に入れて見舞う」とある。

二人の親密な関係を決定づける小旅行は「ボン・マルシェ日記」などからその直後と推測できるが、今川英子はそれを「『滞歐記』『巴里日記』の両方の四月二八日付にあるモンモラシイへの旅であり、続く二九日から五月一日までのフォンテンプローヤバルビゾンへの旅」と考える⁽⁷²⁾。そして、その旅は「帰国前の別れの思い出のため」だったと位置づけている。「ボン・マルシェ日記」では当該期間を含めた四月二五日から帰国直後の六月末までのページが破り取られており、その事実の有無を裏づけることが出来ない。しかし、この行為こそ、芙美子が誰にも知られたくないと思っていた証左であり、彼女が後日、証拠隠滅を図ったと考えても不思議ではない。

ちなみに『林芙美子紀行集 下駄で歩いた巴里』の「春の日記」の項によると、その間の芙美子の行動は次のように簡略に記されている⁽⁷³⁾。

四月二八日夕、パリの北停車場を列車で出発し、午後七時にモンモランシイに到着、その夜は丘の上の小さなホテルに宿泊する。翌二九日、正午に起床して一旦パリに戻る。そして、その日の夕方、パリ・リヨン停車場から再び列車で発ち、フォンテンプローヤに到着、同夜は「サボイ・ホテル」に宿泊する。翌三〇日午後六時、当地を去ってバルビゾンに向かい、「シャルメッテ」というホテルに宿泊。翌五月一日は近くにあるミレーヤルソーのアトリエを見物し、夜にパリに戻った—というもので、これでは一人旅なのか、白井と一緒にだったのかは不明である。

一方、芙美子はこの旅のことを夫、緑敏に宛てた手紙で次のように書いている。

「一日からこの四日にかけて仏蘭西の田舎に行つて大変な収かくを得て来た。ホンテンプローヤと云ふ森の田舎に始め行き、そこで一泊それより乗

り合自動車でバルビゾンと云ふ小村に行きました」「ホンテンブローから四里の青葉の並木の森を抜けたのは、一生のうちの美しい風景です。バルビゾンと云ふ小村はミレーの生れたところで、こゝではミレーのアトリエと最後に息を引とつたベッドを見ました」「バルビゾン！こゝは貴方に見せたい美しい村です。ホテル シヤルメツツと云ふのに一泊 こゝでは閑古鳥やナイチンゲールの鳴き声を聞く。全く、ミレーの風景のやうなところで、オリーブ、梨桃なぞのさかりで、すてきな旅でした」「帰心矢の如し。おまちあれ⁽⁷⁴⁾」。

これはまさに帰国を前にした感傷的な一人旅で、画家である夫にその風景の素晴らしさを殊更強調しているのも、何か後ろめたい事実を隠そうとする意図すら感じられる。いずれにせよ、白井との二人旅であることを露^{つゆ}ほども感じさせない筆裁きである。

後者のフォンテンブローはパリから列車で約一時間半の距離にあり、パリ・リヨン駅を午前七時二分発初の列車に乗車し、当地では『巴里日記』に「森の宮殿のような白亜のホテル」と描写されている「サボイホテル」に宿泊している。また、それに続くバルビゾンへの旅では「オテル・ド・シヤルメツツ」というホテルに泊まっている。当時の芙美子は帰国を間近に控えていたが、その旅費を工面できず、日本の出版社から前借りするほどお金に困っていた。それなのに、この旅行では高級な二等車に乗り、さらに豪華な「サボイホテル」に宿泊している。それに加えて、「日記」には「旅から戻ったらこのホテルに泊まりましょう」という記述もあり、今川英子はそれらを根拠にこの小旅行が別離を前にした二人の愛を確かめ合う旅だったのではないかと考察している。

さらに、夫に出した手紙の中で、本来、大いに誇って然るべき高級ホテル「サボイ」の名前だけが割愛されている点も極めて不可解と言わざるを得ない。この小旅行については中上紀も今川と同様の見解で、「夫がある身だから、苦しみ悩んだ恋だったと思う。しかし、そこでつけていた日記の、せっかく書いた二ヶ月間にもわたるページの部分を破りってしまった彼

女の行為は、その恋に熱中した時間を消し去ろうとしているようで、どこかほほえましくある⁽⁷⁵⁾」と述べている。

このように、二人はもはや心身ともに男女の関係になったと考えるのが妥当と思われるのだが、平林たい子はそれに異を唱える。「世の中の万事をよく知っている彼女が、性の掬だけには実にうとかった」としながらも、「年のせいばかりではあるまい。彼女は、もう『放浪記』のお美美さんではない」「それに外山とのほろにがい恋の失敗のあとだけに、警戒する心は一人^{ひとしお}であった筈⁽⁷⁶⁾」と白井とは一線を越えずに踏み止まったと考える。また、清岡卓行も「林芙美子はパリ滞在の最後に、あえていえば相思相愛でありながら、また自由に行動できる環境にありながら、多分肉体関係に入ることをおたがいに自制した」「二人のあいだは最後まで清純のままつづいた」（『マロニエの花が言った』）と同様の見解である。

しかし、芙美子は本当に踏み止まったのだろうか。平林、清岡ともに芙美子が白井と一緒に小旅行をした事実を認めながらも、二人の関係はプラトニックラブで終わったとしている。それでは人妻でありながらあれほど奔放に恋を重ね、それを明け透けに語り、綴ってきた彼女が、何故「ボン・マルシェ日記」の肝腎のページを破り捨てる必要があったのだろうか。実際、破られずに残された当該期間直前の頁には「何としても私が悪いのです」「どんなムチでもうけましょう」という重大な告白が記述されているのである。

さらに、平林説に反論するとすれば、彼女は踏み止まった理由の一つに「そんな無軌道なことをする歳でもない」と指摘しているが、この時の芙美子はまだ二十八歳で、女盛りだったのである。しかも、プラトニックラブだったとするなら、恋多き芙美子ゆえ、そのようなことは日常的に起きていたわけで、その程度のことで「日記」にわざわざ夫に対する^{しよくざい}贖罪の念を綴る必要はなかったのではなかったか。

いずれにせよ、外山五郎から始まった芙美子の「^{パリ}巴里の恋」は最後の段階で白井晟一に収斂され、結ばれぬ宿命にあったとはいえ、大輪を咲かす

ことになったのである。しかし、二人の恋は芙美子が既婚者であることに加え、それぞれの出自や生い立ち、家柄の違いなどもあって、結局「成らぬ恋」に終わることを芙美子は承知していた。それは、『巴里日記』にある次の言葉に凝縮されている。

「私は日本の可哀想な私の家族を忘れることがどうしてもできません。S氏(筆者注：白井のこと)よ、あなたはあなたの幸福輝くばかりの道があるのでせうし、私には私の道があるのだらうと思ひます。貧しい私は、貧しい人達とともに歩む道しかありません」「貴方は肉体も精神も、すべてに互り富有な人です。貴方を囲む沢山の御家族をこめて輝かしきあなたの人生に、私はほんたうはすくんでしまつてゐるのかもしれない。私を一人にしておいて下さい」。実際、同書では主人公(芙美子)は帰国後、「S」に良家出身の恋人がいること知って、自ら身を引くという筋立てになっている。

そして、この小旅行から戻って来た後の五月五日は芙美子の二十九回目の誕生日で、彼女は白井から高価な香水と白粉^{おしろい}をプレゼントされている。『巴里日記』には「王冠のついた香水と粉白粉を贈る」「清潔で温雅な」と書かれており、その後「サラベルナル座に音楽を聴きにゆく」(「春の日記」とある。

11. 帰国した後も断ち切れない白井晟一に対する熱い想いとその行方

いずれにせよ、この小旅行を経て、芙美子と白井、双方ともに恋の終焉を受け入れることになる。芙美子はすでに改造社の山本実彦社長から帰国旅費を前借りしており、五月一日、パリの正金銀行でそのお金を降ろし、日本までの三等船切符を購入している。

『滞歐記』によると五月一二日の夜、カフェ「リラ」でI氏(今泉)、O氏(大屋)と会い、その後、東方飯店に移ってパリ最後の晚餐となるが、肝腎のS氏(白井)は少し遅れてやって来る。その後、パリ・リヨン駅に向かい、彼らに見送られてマルセイユに向け出発している。一方、『巴里日記』では『滞歐記』の記述より一日後の五月二三日の夜、S氏(白井)、I氏

(今泉), O氏(大屋), さらにM氏(松尾邦之助)夫妻, H女史たちの見送りを
受け, 午後九時四五分発の列車で出発したことになる。愛するS氏
(白井)はその見送りの列の一番外れに佇み^{たなず}, 悲しげな表情で芙美子を見送
ったというまるで映画の一シーンのような感動的な光景になっている。

パリ到着時の記述と同様, 小説『巴里日記』は事実と異なる設定になっ
ており, 実際の出発日は『滞歐記』の一二日が正しい。また, 神戸入港日
時についても, 『巴里日記』は実際の六月一五日より一〇日遅れの六月二
五日になっている。このように, 『巴里日記』は「日記」と銘打っている
ものの, そのフィクション性を強調しなかったのか, 随所で虚構や脚色が
施されている。

まるで工場労働者のような筋金入りの職業作家, 言葉を代えれば徹底し
た原稿料生活者だった芙美子は, このパリ滞在という高額投資の体験(素
材)を作品化するために, 事実に即した『滞欧記』や「日記」と銘打って
実体験を装った『巴里日記』, さらに「下駄で歩いた巴里」に象徴される
「パリ通信」というべき各種エッセイなどを書いている。わずか半年ばか
りの滞在ということを考えれば, 実に経済効率の良い創作活動ということ
になる。

いずれにせよ, 恋に始まり恋に終わった「芙美子のパリ」は, 五月一三
日午後五時にマルセイユを出航した日本郵船の「榛名丸」とともに終焉へ
と向かう。しかし, 物語はそう簡単には終わらない。一六日, 同船が次の
寄港地であるイタリア・ナポリに着岸した時, 芙美子のパリ渡航の動機と
なったかつての恋人, 外山五郎が乗船して来たのである。まさに, 事実は
小説よりも奇なりで, 『滞欧記』にも「その奇遇なるに驚く」と書かれて
いる。

その外山は三月に古いレコードや不用になった和仏辞典, 醤油を芙美子
に買い取らせてローマに向かい, 当地でキリスト教を勉強して帰途に就く
ところだった。しかし, 外山に対する芙美子の恋は, その後の楠山義太郎,
そして白井晟一の登場で跡形も無く消え失せていた。外山も同様で, 二人

は何度かデッキで顔を合わせるが、互いに無視して親しく語り合うこともなかった。このように、芙美子は恋の亡骸^{なきがら}とともに一九三二(昭和七)年六月一五日、神戸港に帰着するのである。

帰国した翌月の七月八日、白井晟一から「ベルリンに帰着した」ことを知らせる手紙が芙美子の元に届く。この手紙が恋の残り火に勢いを与えたのか、芙美子は八月に入ると一人で長野県戸隠の山に籠っている。その頃、芙美子の心模様は如何なるものであったのだろうか。再び書き続けられるようになった「ボン・マルシェ日記」の八月三日の項にその「解」がある。

「一人ぼつちだと云ふ事を、なぞおそれてゐたのであろう。あの山だつて、此^{この}白樺の木だつて、皆コドクだ、愛情をセイリせぬ女奴、あゝだが、青草の上にむせて、私は涙の流れるまゝの状体〔態〕だ。こゝからは、すべての国が遠い。晟一よ長い事会ひません⁽⁷⁷⁾!」。これは白井に対する恋情が鎮まっているどころか、別離によって却って激しく燃え上がっていることを物語るもので、芙美子は白井の手紙を胸に一人、信州の山中で慟哭^{どうこく}していたのである。芙美子の「巴里の恋」はけっして終わっていなかったのである。

「ボン・マルシェ日記」はその年の一〇月三十一日まで書き継がれているが、最後の記述は「仕事をしなくてはならない。——偶々自殺の事を考へる。晟一よ、帰へつたのであろうか、眼と心で貴方を探す事は大変切ない」「あゝ伸びあがりたや晟一よ⁽⁷⁸⁾!」だった。帰国後、随分日にちが経っているが、芙美子の白井に対する熱い想いはこの段階においても燃え盛っており、このような事実を鑑みても、二人は心身ともに真の恋人同士だったことは疑うべくもないのである。

その白井は五年間にわたるベルリン、パリ、モスクワ滞在を終えて翌一九三三(昭和八年)に帰国しているが、その時は二八歳になっていた。短期間ながら東京・山谷の労働者街で孤児たちの世話をした後、山本有三の『真実一路』の装丁を手がけるなど装幀家として名を成す。その翌年に結婚し、太平洋戦争後は本業の建築に本腰を入れ、一九五一(昭和二六)年に

秋田県・秋ノ宮村役場を設計、それが高く評価されて高村光太郎賞(建築部門)を受けている。

帰国後、芙美子との交流が組上に載せられることはなかったが、注目すべきはこの役場会議室の入り口上部に白井自身の揮毫による「浮雲」のレリーフが掲げられている点である。芙美子はその年に長編『浮雲』を刊行しており、白井がそれから命名したことは間違いないと思われる。さらに、芙美子は同年四月から朝日新聞に『めし』の連載を始めているが、その凡そ芙美子らしからぬ題名について、白井が「あれは私の命名」と語っていたとする証言もある。実際、白井研究で知られる長谷川亮は、帰国後、二人は密かに交流を続けていた可能性があると考ええる。

一方、芙美子の恋心が儂くも消え失せた外山五郎は、帰国後、日本神学校(現東京神学大学)に入学して本格的にキリスト教を学んでいる。そして卒業後、日本キリスト教団九十九里教会(千葉県)へ牧師として赴任し、当地で平穏な生涯を送ったという。一方、一途な想いを抱いて芙美子に纏わり付いた観のある考古学徒の森本六爾は、帰国後に論文「日本に於ける農業起源」を発表、そこで弥生時代すでに農業が行われていたことを実証して一躍、新進気鋭の考古学者として脚光を浴びる。しかし、パリで発症していた結核が進行し、帰国二年後に妻が感染して亡くなり、森本もその翌年の一九三六年一月に死去している。満三二歳だった。余談になるが、その後、松本清張が小説『風雪断碑』で森本を主人公として登場させている。

一方、白井と芙美子の恋のキューピッド的役割を果たした大屋久寿雄は、その後、ビザ切れでパリ警察に摘発され、フランスから国外追放となってベルギーのアントワープに移り、一九三三(昭和八)年の暮れに帰国している。その後は語学力を生かして時事通信の記者として活躍するが、まもなく難病のリエスを患い、長い闘病生活を送っていたある日、突然、懐かしいパリ時代を思い出し、病床で芙美子宛に手紙を書いて送っている。これも時空間を超越した運命の悪戯というべきか、その手紙は芙美子が亡くなる一九五一(昭和二六)年六月二七日(死亡は二八日午前一時)、あるいはそ

の前日に届き、封が切られていることから彼女がそれを読んだことは間違いない。そして、その大屋も彼女の後を追うようにして、半年後の同年一二月に亡くなっている。

12. 「林文学」の真髄としての恋愛放浪と新たに現れた高松棟一郎

芙美子は「良人と添寝しながらも、なおかつよその男の夢を見る」と嘯くほど多情な女性で、実際、その人生は彩り鮮やかな恋愛模様、そして数々の恋人の存在で知られる。「白井」以後についてはこの稿で詳述しないが、その中で、毎日新聞記者だった高松棟一郎の名を挙げない訳にはいかないだろう。

彼は芙美子好みの美男子で、妻帯者でもあった。それ故、深い仲になっておれば、ダブル不倫ということになるが、関川夏央は「深い関係にあった」と断じている。その高松は一九四〇(昭和一五)年にロンドン特派員として赴任したため、しばらく関係は途切れることになるが、芙美子がかつて親密にしていた楠山義太郎と同じ新聞社の同じ特派員、彼女と男の紅い糸は至るところで絡み合うのである。

一方、芙美子是一九四二(昭和一七)年一〇月から四三年五月にかけて、軍の報道班員としてシンガポールや仏印、ジャワ、ボルネオなどを巡り歩く。そして帰国後、ロンドンから戻って来た高松と再会し、二人の恋は再燃する。一九四八(昭和二三)年一一月、芙美子は短編『晚菊』を発表しているが、ここには高松棟一郎と思われる人物が登場している。その後、高松は毎日新聞を退社して東大新聞研究所の教授に就任するが、一九五九(昭和三四)年五月に病死する。四十八歳だった。平林たい子は「最晩年に至っても芙美子は恋愛を模索していた」と証言しているが、その恋愛に対する凄まじいばかりの情熱は想像を絶するものがある。ちなみに、最後の恋人は岩波書店の講座本の監修をしていたドイツ文学者だったと言われて

いる。

このような果てし無き“恋愛放浪”こそが「林文学」の真髄であり、エ

キス、エネルギー源でもあった。それ故、伴侶の緑敏は彼女の自由奔放な恋愛を見て見ぬ振りをし、事実上、それを容認する寛容さを持ち合わせていた。桐野夏生は「パリから、夫の緑敏に宛てた手紙を読むと、緑敏が養われている女に思えるほどに、支配的で父性的でさえある⁽⁸¹⁾」と述べているが、数限りなく恋愛(不倫)を重ねても、結局、最後には夫の元へ舞い戻っているという事実に鑑みれば、緑敏の懐^{ふところ}が如何に深かったか、さらに彼を深甚に愛していたかが分かるというものである。確かに、緑敏が耐え忍んだ精神的葛藤は想像を絶するものがあつたに違いないが、その一方で彼は人一倍芯の強い人物であり、包容力があり、そして作家である芙美子を深く愛していたのである。

「彼女は背が小さい方で、決して美しくはなかった。が、着物や髪かたちに、何か俗びない、愛らしい趣味がある⁽⁸²⁾」「彼女は料理がうまく、裁縫も器用で有りがたいお姉さんだ⁽⁸³⁾」。これは無名の時代から彼女と生活を共にしたことがある年下の作家、平林たい子の芙美子評である。この言から明らかなように、芙美子はどこにでもいるごく普通の女性で、その自然体ゆえにいつまでも少女のような愛らしさと、飾り気の無い素直さを併せ持った魅力ある人物だったことが分かる。その一方で、恵まれなかった生い立ちへの反動があつたのか、高貴なるものへの憧れが人一倍強く、こと男性に関しては知的でダンディ、さらに貴公子のような美男子に強く心惹かれる傾向があつた。

それは文学においても同様で、理想が高ければ高いほど失望感も強く、誰をも寄せ付けない孤独感に苛まれることも珍しくなかった。万事において、全力を出し切る峻烈な競争主義者なのである。そのような性格ゆえ、文壇仲間や編集者たちから我儘^{わがまま}、自己中心、さらに口さがない輩からは嫉妬深くて意地悪、鼻持ちならないなどと忌み嫌われることが多かつた。関川夏央も「人を押しつけて電車の空席をめざす中年女性を思わないではない⁽⁸⁴⁾」といった印象を述べているが、その一方で「感じが悪い人とは思わないが、騒々しくてたくましい人」「そのたくましさは肯定的に言えば生命

力だが、ありていにいえば周囲は相当に迷惑困惑しただろう自我拡大への飽かぬ意欲のあらわれである⁽⁸⁴⁾と評価している。

そのようにがむしゃらに我が道を通る芙美子であるが、それ故にというべきか、いつの間にかその肉体に危機が静かに忍び寄っていた。一九五一(昭和二六)年六月二七日、彼女はあまり食欲はなかったが、雑誌「主婦之友」の「名物食べあるき」の企画取材で銀座「いわしや」を訪れ、その後、編集者たちを連れて深川の鰻屋「みやがわ」で慰労会を開いている。それがお開きになって帰宅するのだが、午後一時頃になって急に胸の痛みを訴え、約二時間後の翌二八日午前一時頃、心不全で急死するのである。享年四十八だった。

恵まれない少女期から才能を一気に開花させた青春時代、さらに女性流行作家として一世を風靡^{ふうび}する四十歳代に至るまで、芙美子の精力的な作家活動を支えてきたのは類稀^{たぐいまれ}なる堅固な意志と強靱な体力だった。しかし、健康を顧みない彼女の猛烈な仕事ぶりは、若い頃からの持病である心臓弁膜症を確実に悪化させ、疲労のあまり執筆が捗らなかつたり、ちょっとしたことでも息切れを起こすようになっていた。芙美子はそのような症状に気づいていたが、何事も仕事優先で、その都度、薬で誤魔化して執筆活動を続けていたのである。

実際、亡くなった一九五一年の前半だけを見ても、「新潮」や「別冊文藝春秋」「中央公論」など文芸誌に五本の短編小説、それに加えて朝日新聞、婦人公論、主婦之友などにも原稿を書くという超人的な仕事ぶりだった。想像を絶する激務の日々だったわけであるが、これについて平林たい子は「将来、競争相手になる他の女性作家に仕事を奪われなくなかったから、自分でできる限りの、あるいはそれ以上の仕事を引き受けた」と分析している。この見解に対し、関川夏央は「日頃の彼女の行動、性癖から見て否定しがたい真実味があった⁽⁸⁵⁾」としたうえで、「芙美子は女性新人作家の文壇への参入をいやがった。実力ある女流作家に対しては闘争心をかくさなかつた⁽⁸⁶⁾」「そのために、林芙美子は過労死した⁽⁸⁵⁾」と断じている。つま

り、自身の命を削ってまで激しく競い合っていたわけで、その意味では覚悟の壮絶な死だったと言えるかもしれない。

芙美子が亡くなった後、駆け付けた安井曾太郎が彼女の死に顔を素描し、彫刻家、清水^{たかし}多嘉示がデスマスクをとっている。そして、七月一日に執り行われた葬儀では川端康成が葬儀委員長を務め、文壇の暴れ馬だった芙美子の数々の無礼を念頭に「死は一切の罪悪を消滅させますから、どうか故人を許してやって下さい」と異例の弔辞を述べている。

おわりに

芙美子の出世作である『放浪記』は、自身の人生航路に数々の脚色を施し、それをあたかも実体験記であるかのように物語化した小説である。本稿で引用した『巴里日記』も、「日記」と銘打っているものの、実は幾多の虚構を練り込んだ物語なのである。それでは両作品の間で如何なる相違があるのだろうか。それについて、平林たい子は次のように述べている。

「持ち金の欠乏と、孤独に極限を求めて読者の焦躁を待つ技巧などは、かつていまでも一貫したものだが、『放浪記』では魅力的であった庶民語のむき出しな喚きが(『巴里日記』では：筆者挿入)なくなって、しんみりした洗煉が支配している。その裏を縫った悲哀の一筋のため、よむ者には、さらに一入の魅力がある⁽⁸⁷⁾」。つまり、後者は異国における孤独と悲哀と恋という点において、前者に無い魅力を包含しているため、読者にとって一層、感動的なものになっていると考えるのである。

確かに、芙美子の作品はいずれを取って見ても、その根底に社会や時代に対する不安や警戒、さらに焦燥や哀しみといったネガティブな心理が深層水のように流れており、それは初出の『放浪記』以降、一貫して見られる特徴である。与那原恵も「自分の将来に対する確証のない毎日への不安⁽⁸⁸⁾」がそれらの根底に横たわっていると考えるが、それは取りも直さず幼少期の「原体験」が息づいている証左でもある。そして、それらの不安を^{ふっしょく}払拭するために芙美子は「書く」という作業に没頭し、その結果「生」を

実感することが出来たと言えなくもない。

その「書く」姿勢について、立松和平は「林芙美子の心の底には、人間は言葉や顔つきや食べるものが違って、所詮みんな同質なのだという大きな楽観主義がある。人を分けへだてしない博愛主義といってもよいかもしれない。主義というより、もっと、彼女には天賦の、自然きわまりない資質である⁽⁸⁹⁾」と分析している。恵まれなかった生い立ちが一種の起爆剤となって、彼女の文学の中で燦然と輝いており、そこには彼女の身に染み込んだ庶民感覚や大衆視線があると指摘するのである。

このような見解に対して、中村光夫も一応「林芙美子は生まれながらに民衆の血を享け、それを彼女なりの文学の源泉とした⁽⁹⁰⁾」と同調している。しかし、彼女が尋常成らざる上昇志向の持ち主で、巨額^うの原稿料によって贅^{ぜい}を尽くした豪邸を建てたことに触れ、「民衆出身の林芙美子が晩年には成金趣味と云ってよいようなスノビズムを生活に発揮したことは、人間がいかに自分に欠けたものに憧れるかを示す興味ある例証⁽⁹⁰⁾」であると、まるで冷笑するかのような辛辣な批評を下している。

その自宅に関わることだが、「恋愛を稼業にしていた」とまで揶揄される芙美子が男関係でどれほど不実を働こうとも、泰然自若として家を守り通した夫、緑敏の存在は限りなく大きい。実際、芙美子はどのような大恋愛をしようとも、必ずその豪邸に戻って来ているのである。つまり、そこは芙美子が唯一、安心できる「巢」だったのである。数知れない恋を重ねた芙美子であるが、生涯を通じて唯一、別れることがなかったのも緑敏だけである。その意味において、芙美子の文学や人生は、終生の良人、緑敏なくして存在し得なかったといっても過言ではない。

その緑敏は芙美子の死後、彼女の姿が投影されていたに違いないバラの栽培をしながら平穏な日々を過ごし、彼女が亡くなってから三十八年後の一九八九年七月に死去している。また、芙美子以上に男に対して奔放だった母、キクは彼女の没後三年の一九五四年五月に亡くなっている。

一方、芙美子の「巴里の恋人」であった白井晟一は一九八〇年に日本芸

術院賞を受賞し、書家としても活躍した後、一九八三年十一月に七十八歳で病死している。

引用・参考文献

- (1) 「文藝別冊 林芙美子 恋と宿命の“放浪記”」^{はらわた}「腸の詩」, 正津勉, 河出書房新社, 2004, 147頁。
- (2) 『林芙美子/宮本百合子』「林芙美子」, 平林たい子, 講談社文芸文庫, 2003, 22頁。
- (3) 「文藝別冊 林芙美子 恋と宿命の“放浪記”」^{はらわた}「私の文学生活」, 林芙美子, 河出書房新社, 2004, 43頁。
- (4) 同, 44頁。
- (5) 「文藝別冊 林芙美子 恋と宿命の“放浪記”」^{はらわた}「人生無常」, 平林たい子, 河出書房新社, 2004, 126頁。
- (6) 『林芙美子/宮本百合子』「林芙美子」, 平林たい子, 講談社文芸文庫, 2003, 117頁。
- (7) 同, 118頁。
- (8) 同, 120頁。
- (9) 『林芙美子 巴里の恋』「解説 バリは芙美子の解放区だったか」, 今川英子, 中央公論新社, 2001, 230頁。
- (10) 『女流 林芙美子と有吉佐和子』「林芙美子の旅」^{はらわた}「花の巴里はうそ寒い」, 関川夏央著, 集英社, 2009, 36頁。
- (11) 『林芙美子/宮本百合子』「林芙美子」, 平林たい子, 講談社文芸文庫, 2003, 123頁。
- (12) 同, 124頁。
- (13) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 184~185頁。
- (14) 同, 187頁。
- (15) 同, 185頁。
- (16) 『林芙美子随筆集』「朝御飯」, 林芙美子著, 武藤康史編, 岩波文庫, 2003, 180~181頁。
- (17) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 186頁。
- (18) 『林芙美子 巴里の恋』「巴里の小遣ひ帳」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 12頁。
- (19) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 188頁。

- (20) 『林芙美子 巴里の恋』「巴里の小遣ひ帳」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 13頁。
- (21) 同, 16頁。
- (22) 同, 17頁。
- (23) 同, 30頁。
- (24) 同, 31頁。
- (25) 『林芙美子紀行集 下駄で歩いた巴里』「下駄で歩いた巴里」, 林芙美子著, 立松和平編, 岩波文庫, 2003, 105頁。
- (26) 同, 104頁。
- (27) 同, 106頁。
- (28) 同, 111頁。
- (29) 『林芙美子/宮本百合子』「林芙美子」, 平林たい子, 講談社文芸文庫, 2003, 125頁。
- (30) 『林芙美子 巴里の恋』「巴里の小遣ひ帳」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 35頁。
- (31) 『林芙美子隨筆集』「文学的自叙伝」, 林芙美子著, 武藤康史編, 岩波文庫, 2003, 213頁。
- (32) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 199頁。
- (33) 『林芙美子 巴里の恋』「巴里の小遣ひ帳」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 44頁。
- (34) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 203頁。
- (35) 『旅だより』, 林芙美子著, 改造社, 1934, 188~189頁。
- (36) 同, 190頁。
- (37) 『林芙美子 巴里の恋』「一九三二年の日記」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 63頁。
- (38) 同, 64頁。
- (39) 同, 65頁。
- (40) 同, 66頁。
- (41) 『旅だより』, 林芙美子著, 改造社, 1934, 199頁。
- (42) 同, 200~201頁。
- (43) 『林芙美子 巴里の恋』「一九三二年の日記」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 69頁。
- (44) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」, 林芙美子著, 今川英子編, 中央公論新社, 2001, 205頁。
- (45) 『林芙美子 巴里の恋』「一九三二年の日記」, 林芙美子著, 今川英子編,

- 中央公論新社，2001，73頁。
- (46) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，206頁。
- (47) 同，211頁。
- (48) 同，212頁。
- (49) 『林芙美子 巴里の恋』「一九三二年の日記」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，74頁。
- (50) 『旅だより』，林芙美子著，改造社，1934，207頁。
- (51) 同，226頁。
- (52) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，214頁。
- (53) 『林芙美子 巴里の恋』「一九三二年の日記」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，79頁。
- (54) 『林芙美子紀行集 下駄で歩いた巴里』「ひとり旅の記」，林芙美子著，立松和平編，岩波文庫，2003，152頁。
- (55) 『旅だより』，林芙美子著，改造社，1934，212頁。
- (56) 『林芙美子紀行集 下駄で歩いた巴里』「ひとり旅の記」，林芙美子著，立松和平編，岩波文庫，2003，154頁。
- (57) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，216頁。
- (58) 『旅だより』，林芙美子著，改造社，1934，230頁。
- (59) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，220頁。
- (60) 『林芙美子 巴里の恋』「一九三二年の日記」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，100頁。
- (61) 同，101頁。
- (62) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，221頁。
- (63) 『林芙美子 巴里の恋』「一九三二年の日記」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，110頁。
- (64) 同，117頁。
- (65) 同，117～118頁。
- (66) 同，121頁。
- (67) 同，123頁。
- (68) 同，123～124頁。
- (69) 同，127頁。
- (70) 『林芙美子 巴里の恋』「解説 パリは芙美子の解放区だったか」，今川英子，

- 中央公論新社，2001，248頁。
- (71) 『女流 林芙美子と有吉佐和子』「林芙美子の旅」「主人に対して相済まない」，関川夏央著，集英社，2009，60頁。
- (72) 『林芙美子 巴里の恋』「解説 パリは芙美子の解放区だったか」，今川英子，中央公論新社，2001，249頁。
- (73) 『林芙美子紀行集 下駄で歩いた巴里』「春の日記」，林芙美子著，立松和平編，岩波文庫，2003，178～180頁。
- (74) 『林芙美子 巴里の恋』「夫への手紙」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，223頁。
- (75) 「文藝別冊 林芙美子 恋と宿命の“放浪記”」「花のいのちを權にして」，中上紀，河出書房新社，2004，78～79頁。
- (76) 『林芙美子/宮本百合子』「林芙美子」，平林たい子，講談社文芸文庫，2003，133頁。
- (77) 『林芙美子 巴里の恋』「一九三二年の日記」，林芙美子著，今川英子編，中央公論新社，2001，152～153頁。
- (78) 同，179頁。
- (79) 『林芙美子隨筆集』「恋愛の微醺」，林芙美子著，武藤康史編，岩波文庫，2003，56頁。
- (80) 『女流 林芙美子と有吉佐和子』「林芙美子の旅」「漢口，女流一番乗り」，関川夏央著，集英社，2009，85頁。
- (81) 「文藝別冊 林芙美子 恋と宿命の“放浪記”」「放浪母子」，桐野夏生，河出書房新社，2004，15頁。
- (82) 「文藝別冊 林芙美子 恋と宿命の“放浪記”」「人生無常」，平林たい子，河出書房新社，2004，124頁。
- (83) 同，125頁。
- (84) 『女流 林芙美子と有吉佐和子』「林芙美子の旅」「家を建てる」，関川夏央著，集英社，2009，86頁。
- (85) 『女流 林芙美子と有吉佐和子』「林芙美子の旅」「働く『女流』」，関川夏央著，集英社，2009，16頁。
- (86) 『女流 林芙美子と有吉佐和子』「林芙美子の旅」「一九五一年六月二八日」，関川夏央著，集英社，2009，114頁。
- (87) 『林芙美子/宮本百合子』「林芙美子」，平林たい子，講談社文芸文庫，2003，133頁。
- (88) 「文藝別冊 林芙美子 恋と宿命の“放浪記”」「対談 意地悪で嫉妬深くても可愛くて」，与那原恵，河出書房新社，2004，28頁。
- (89) 『林芙美子紀行集 下駄で歩いた巴里』「解説 命の瀬戸際の旅」，立松和平，岩波文庫，2003，324頁。

- (90) 「文藝別冊 林芙美子 恋と宿命の“放浪記”」「林芙美子文学入門」, 中村光夫, 河出書房新社, 2004, 186~187頁。